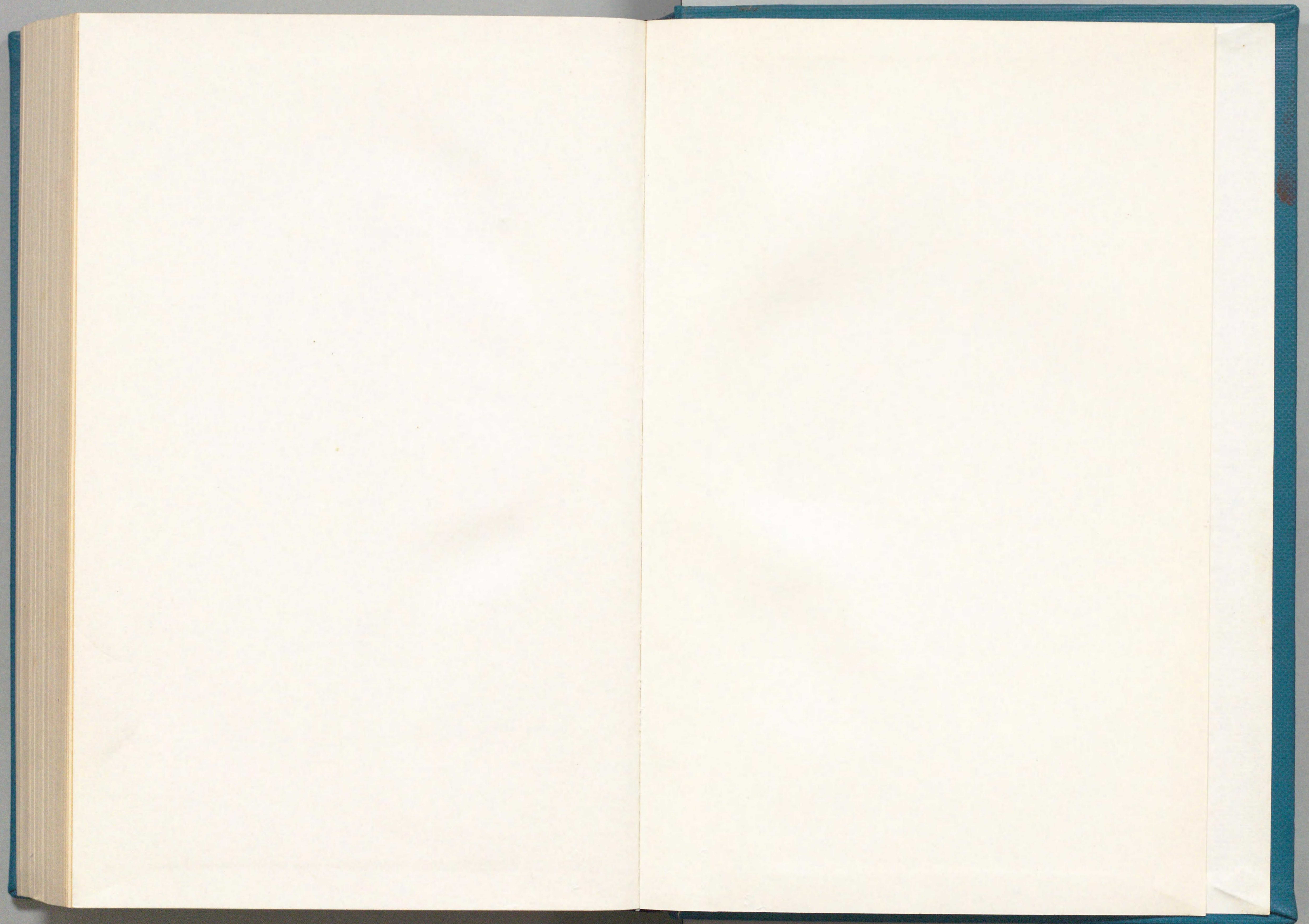


911.12
1442m







IT V 69

萬葉集新考
中



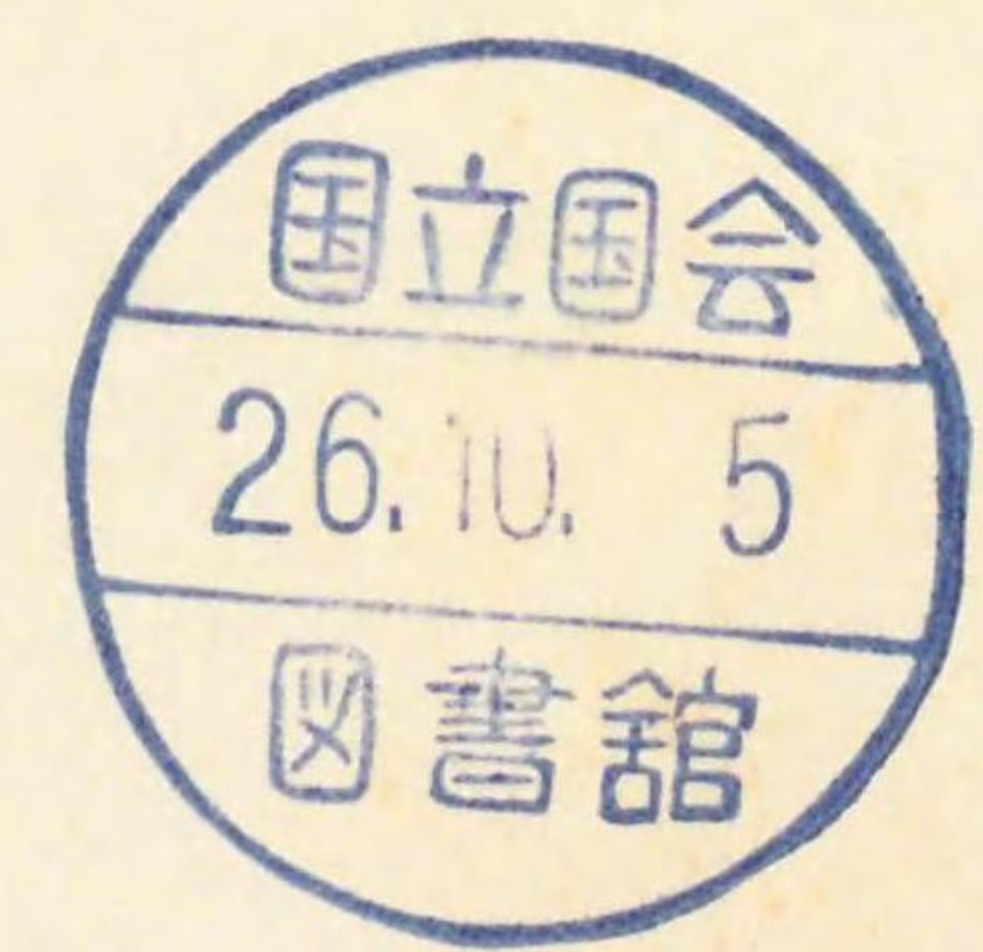
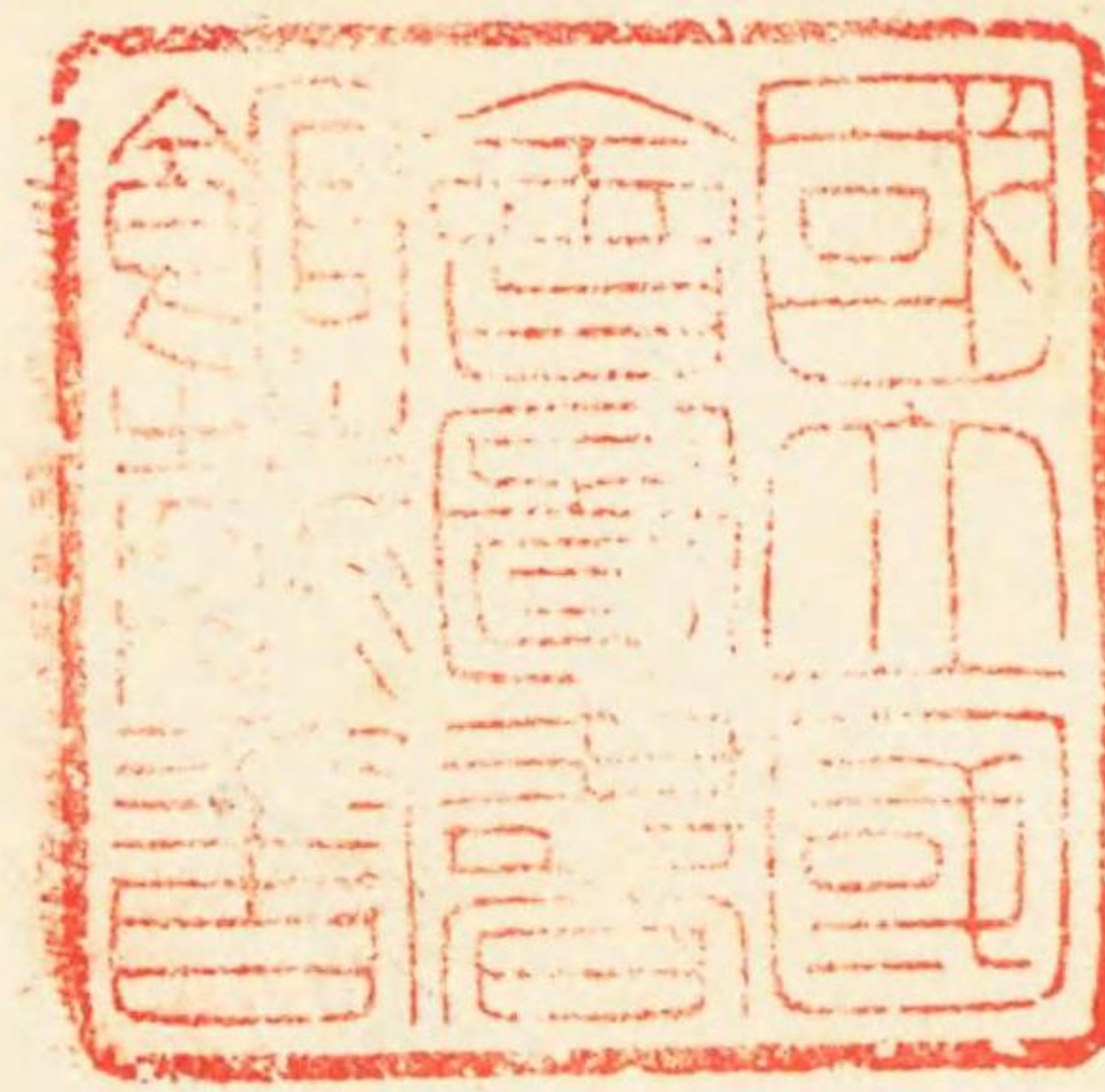
IT V 69

萬葉集新考

中



911.12I442 m



247637

圖版解説

紙本縦四尺一寸三分、横一尺七寸五分。加藤千蔭が萬葉集卷三（本書四一五頁）なる長歌を書いたものである

譯文

山部宿禰赤人望三不盡山一作歌

天地之アメツチノ分時從ワカレシトキユ神左備手カムサビテ高貴寸タカクタフ
トキ駿河有スルガナル布土能高嶺乎フジノタカネチ天原アマノハラ振放見者
フリサケミレバ度日之ヲタルヒノ陰毛隱比カゲモカクロヒ照月乃テルツキノ光
毛不見ヒカリモミエズ白雲母シラクモモ伊去波伐加利イユキハバカリ時自久
曾トキツク雪者落家留ユキハフリケル語告カタリツギ言繼將往イヒツギユカ
△不盡能高嶺者フジノタカネハ

反歌

田兒之浦從タゴノウラユ打出而見者ウチテミレバ真白衣マシロニゾ不盡能
高嶺爾フジノタカネニ雪波零家留ユキハフリケル

千蔭書

山部宿禰赤人望三不盡山一作歌

天地之アメツチノ分時從ワカレシトキユ神左備手カムサビテ高貴寸タカクタフ
トキ駿河有スルガナル布土能高嶺乎フジノタカネチ天原アマノハラ振放見者
フリサケミレバ度日之ヲタルヒノ陰毛隱比カゲモカクロヒ照月乃テルツキノ光
毛不見ヒカリモミエズ白雲母シラクモモ伊去波伐加利イユキハバカリ時自久
曾トキツク雪者落家留ユキハフリケル語告カタリツギ言繼將往イヒツギユカ
△不盡能高嶺者フジノタカネハ

千蔭書

凡例

漢字のみにて書けるが萬葉集の原文にて假字がきにせるは譯文なり
原文は寛永版本に依りたり。但誤字なる事明白なるものは指摘の煩を
避けて直に改めたる處あり。又俗字を正字に改めたる處あり
譯文中傍訓を施したるは諸家(特に略解古義)の訓の一定せざりし處と、
諸家の訓を斥けて余が新に訓ぜし處と、讀者が讀み悩み又は讀み誤る
べき恐ある處となり。その別は註解を讀まばおのづから明ならむ
歌の中に□を以て圍めるは衍字、即宜しく除くべき字
字間に△を挿みたるは脱字又は脱文ある處
字の左傍に小さき△を附したるは誤字
字の右傍に△を附したるは注意すべき字なり
又歌の中に()を以て括したるは枕辭なり

萬葉集新考第五

目次

卷十二

正述心緒(柿本人麿歌集之歌)	二五四七頁
寄物陳思(柿本人麿歌集之歌)	二五五二頁
正述心緒	二五六二頁
寄物陳思	二六一三頁
問答歌	二六八八頁
羈旅發思	二六九八頁
悲別歌	二七一九頁
佛足石歌新考(附錄)	二七三九頁

卷十三

雜歌……………二七六三頁

相聞……………二八一〇頁

問答……………二八八七頁

譬喻歌……………二九〇七頁

挽歌……………二九一一頁

卷十四

東歌……………二九五七頁

○……………二九五八頁

相聞……………二九六五頁

譬喻歌……………三〇三九頁

雜歌……………三〇四八頁

相聞……………三〇六四頁

防人歌……………三一六五頁

譬喻歌……………三一六八頁

挽歌……………三一七一頁

卷第十四轉訛例一斑(附錄)……………三一七三頁

流布本卷第十二至卷第十四目錄……………三一八五頁

萬葉集新考卷十二



井上通泰著

正述心緒

我背子があさけのすがたよく見ずてけふの間をこひくらすかも
我背子之朝明形吉不見今日間戀暮鴨

アサケノスガタは夜ガ明ケテ歸行キシ男ノ姿なり○卷十一九七四頁にも
朝戸出の君がすがたをよく見ずて長き春日をこひやくらさむ
とあり

我心等望使念ワガココロトソノシモヘカ新夜アサひと夜もおちず夢見イメニシユル

我心等望使念新夜一夜不落夢見

考に望使念を無便念の誤としてワガココロトスベナクモヘバとよみ古義に我心
等を我等心の誤とし望使念を氣附念の誤としてアガココロイキヅキモヘバとよ

めり。初句はもとのまゝにてワガココロトとよむべし。第二句も亦もとのまゝにてノヅミシモヘカとよむべきか。ノヅミシモヘカは夢ニ見ムト望ミ思ヘバニヤとなり。使は卷九(一八三八頁)にクル侍キニとあれば侍の誤にてもあるべし。○第三句を舊訓にアタラヨノとよめるを考に新玉の誤としてアラタマノとよめり。こは下に今更にねめやわがせこ荒田麻之ひと夜もおちす夢にみえこそとあるに據れるなれど古義にはその荒田麻之を荒田夜之の誤としこゝをもアラタヨノとよみて

アラタ夜とは世の事を新世アラタヨといふと同例にて經カハリ經カハリアラタマル夜と云ことなり

といへり。此説に従ひて次々ニ來ル夜といふ意とすべし。○結句は舊訓にユメニミエケリとよみ考にイメニシミユルとよめり。考に従ふべし

與愛ウツクシトわがもふ妹を人皆の如去見ユクゴトミ耶手ミメにまかずして
與愛我念妹人皆如去見耶手不纏爲

初句を舊訓にウツクシトとよめるを略解にウルハシトに改めたるはわろし。カハ

ユシといふ意なればウツクシトとよむべし(二三八〇頁参照)○第四句は略解の如くユクゴトミメヤとよむべし。但意は古義にいへる如く世間ノ人ノ行クラ見ル如クヨソニ見メヤハといへるなり。略解の釋は非なり

このごろの寢イノ之不寢ネラニズしきたへの手枕テマクまきて寢欲ホレコソ

比日寢之不寢敷細布手枕纏寢欲

第二句は略解に従ひてイノネラエヌハとよむべく結句も同書に従ひてネマクホレコソとよむべし。古義にホリコソに改めたれどホレバコソといふ意なれば必ホレコソとよむべし。妹ノ手枕ヲマキテ寢マクホレバコソ寢ノ寢ラレヌナレといへるなり

忘哉ワスルヤトものがたりして意遣ナグサメテ雖過スグセドすぎず猶戀ナホソコレシキ

忘哉語意遣雖過不過猶戀

初句は契沖に従ひてワスルヤトとよむべし。第三句を從來ココロヤリとよめり。宜しくナグサメテとよむべし(二二七三頁及二二九八頁参照)○雖過は契沖に従ひて

スグセドとよむべく結句は眞淵に従ひてナホゾコヒシキとよむべし。スグセドスギズは思ヲ過シ遣レド思ガ過ギ行カズとなり

夜不寢安不有しろたへの衣不脱ただにあふまで

夜不寢安不有白細布衣不脱及直相

初二を舊訓にヨルモネズヤスクモアラズとよみ略解にヨルモネジヤスクモアラジとよめり。宜しくヨヲネズテヤスクモアラズとよむべし。卷三(五六三頁)にイカニカヒトリ長夜乎將宿とあり。ヤスクモのモは軽く添へたるなり。○第四句を従來コロモモヌガジとよめり。宜しくコロモハヌガジとよむべし。丸寢セムといへるなり

後相吾莫戀妹はいへどこふる間に年はへにつつ

後相吾莫戀妹雖云戀間年經乍

初句を舊訓にノチニアハムとよみ契沖はノチモアハムとよめり。後者に従ふべし。さてノチモアハムは獨立せる文なり。吾に續けるにあらず。○第二句はワニナコヒントとよむべし

ただにあはず有諾いめにだに何人ことのしげけむ

或本歌曰うつつにはうべもあはなくいめにさへ

直不相有諾夢谷何人事繁

或本歌曰寢者諾毛不相夢左倍

第二句は契沖に従ひてアルハウベナリとよむべし。○第四句を二註共にナニシカ人ノとよめり。宜しくナニカモとよむべし。ナニカモは何カハにおなじくシダケムは繁カラムにおなじ。イメニダニは後の語法によらば或本の如く夢ニサへといふべし。一首の趣は夢にだに見えぬを訝り恨みたるなり

或本歌の寢は寤の誤ならむ

(ぬばたまの)彼△夢見繼哉そてほす日なく吾戀矣

烏玉彼夢見繼哉袖乾日無吾戀矣

第二句を舊訓にソノヨノユメニとよめるを宣長は彼夢を夜夢の誤としてヨルノイメニヲとよめり。彼の下に夜を補ひてソノヨノイメノとよむべし。ソノ夜といへ

るは夢を見し夜なり○第三句は契沖のミエツゲヤとよめるに従ふべし。ミエツゲヤは見エ繼ゲカシとなり○結句は舊訓にワガコフラクヲ古義にワレハコフルヲとよめり。後者に従ふべし

うつつには直不相いめにだに相見與わがこふらくに

現直不相夢谷相見與我戀國

第二句を舊訓にタダニモアハズとよみ古義にタダニアハナクとよめり。古義に従ふべし。第四句は契沖に従ひてアフトミエコソとよむべし

寄物陳思

人所見表結、人、不見した紐あけてこふる日ぞおほき

人所見表結、人、不見裏紐開戀日太

上三句を考以下にヒトミレバウヘラムスビテ人ミネバとよめり。宜しくヒトノミルウヘハムスビテ人ノミスとよむべし。ミルを所見と書けるは卷十二(二二四頁)

にヒトノ所寐と書けると同例とすべきか。又は二處ながら所を衍字とすべきか。○ウヘは衣の上に結ぶ帯にてシタヒモは禪の紐なり。アケテは解キテなり(二二六頁及二二七九頁参照)○さて考に

下紐のとくるは人に逢はむ前つさがとする故に強ても解てあはむ事をいはふ也

といへれど下紐のおのづから解くるこそ人に逢はむ祥なるべけれ、強ひて解きたらむは祥となるべからず。されば古義には其矛盾を調和して

おのづからとくることはなくとも、おのづから解くるになぞらへて設けてもとさあけたらばもし逢ふこともあらむかと、せめてのわざにひとへにあはむことを希ひてする由なり

といへれど未人をして首肯せしむるに至らず。案ずるに下紐を解くは人に逢はむ呪のみ。はやく卷十一(二二六九頁)にも

眉根かき鼻ひ紐とき待つらむやいつかもみむとわがおもふ君とあり

人言の繁時シガカルトキヲワギモコガ吾妹ワガイモきぬにありせばしたにきましを

人言繁時吾妹衣有裏服矣

第二句を二註共にシダケキトキニとよめり。シダケキといふ辭は無ければシダケカ
ルトキヲとよむべし。○第三句を古義にはワギモコシとよめり。舊訓に従ひてワギ
モコガとよむべし。○結句は古義にソト裏シダニ著コメテ人ニ知ラセズシテアルベキ
モノヲと譯せる如し

(眞珠眼)遠△兼念ひとへごろもを一人きて寢スル

眞珠眼遠兼念一重衣一人服寢

眞淵は眼を附の誤としてマタマツクヲチヲシカネテオモヘレバとよみ、宣長は卷
四(七五八頁)に

眞玉付彼此兼手ヲチコトことはいへどあひて後こそくいはありといへ
又下に

眞玉就彼此兼而むすびつるわが下紐のとくる日あらめや

とあるに據りて遠の下に近の字を補ひてヲチコチカネテとよめり。又雅澄は眼を
服の誤として眞淵の如くマタマツクとよめり。マタマツクは眞玉附クル緒とか、
れる枕辭なり。ツクルといはでツクといへるは連體格の代に終止格をつかひたる
にてクシロツクタフシノ崎ニなどと同格なり。ヲチコチカネテは今ト後トヲ兼ネ
テとなり。○念、寝を二註にオモヘレバ、ネヌとよめり。宜しくオモフニ
ズ、ヌルとよむべし。○四五は二人ノ衣ヲ重ネズシテ獨寢ルとなり

しろたへのわが紐の緒のたえぬ間に戀むすびせむあはむ日まで

白細布我紐緒不絶間戀結爲及相日

卷四(六四五頁)に

獨ねてたえにし紐をゆゆしみとせむすべしらにねのみしぞなく
といふ歌あり。其歌の處にいへる如く獨寢て衣の紐の絶ゆれば夫婦の契に不祥な
る事ありなどいふ俗信ありしなり。されば今は紐の緒の絶えざらむうちにしばら
く結びおかむといへるにてその結方に戀結といふがありしにこそ。契沖千蔭は『古
今集に何ヲカハ戀ノミダレノツガネ緒ニセムとよめるが如し』といへれどアハレ

テフ言ダニ無クバといふ歌とは相與る所なし

因にいふ彼歌の初二はセメテ嗚呼氣ノ毒ヂヤトイフ一言ナリトモ承ラズバといへるなり。遠鏡の譯は自他を誤れり

ニヒバリニイマハルミチノサヤケクモキキケルカモ
新治今作路清聞鴨妹がうへのことを

新治今作路清聞鴨妹於事矣

初二は序なり。初句を從來ニヒバリノとよみ第二句を舊訓と古義とにイマツクルミチとよみ考、略解にはそれにノをよみ添へたり。宜しくニヒバリニイマハルミチノとよむべし。○第三句の清を二註にサヤカニモとよめり。サヤカニといはでサヤケクといふが古語の例なれば(四三九頁アタタケク參照)こゝも舊訓の如くサヤケクモとよむべし。新墾の道路は清潔なればサヤケクモの序としたるなる事古義にいへる如し。○第四句は考に従ひてキキケルカモとよむべし。二註にキキニケルカモとよめるはわろし

山代シロの石田イハタの杜ノに心おそく手向したれや妹にあひがたき

山代石田杜心鈍手向爲在妹相難

石田、神は嫉妬深き神にて此神に手向すれば却りて妹に逢ふ事が妨げらるといふ俗信ありしならむ。卷九(二七二九頁)なる

山科のいは田のもりをふみこえばけだし吾妹にただにあはむかも
の處にいへる事と參照すべし。古義に

石田、神社に心利くたむけしたたましかば神もあはれとうけひきましましてやがて事依しつゝ妹に逢べきに心おそくたむけしたれば神慮に叶はずして納受したまはざりし故にや妹にあひがたかるらむと云るにて奉幣せしことの心鈍かりしを悔るなり
といへるは從はれず

(すがの根の)ねもころごろにてる日にもひめやわが袖妹にあはずして
菅根之惻隱惻隱照日乾哉吾袖於妹不相爲

卷十にも

みな月の地さへさけててる日にも吾袖ひめや君にあはずして

とあり

妹にこひいねぬ朝アサに吹風フクカゼ妹經者イモニフレナバワレニサヘフレ吾共經

妹戀不寢朝吹風妹經者吾共經

朝を舊訓にアシタとよめるを古義にはアサケに改めたり。もとのまゝにて可なり
○第三句以下を略解にフクカゼシイモニフレナバワガムタニフレネとよみ、古義
に四五をイモニシフラバアガムタニフレと改めたり。案ずるに經フルは下二段活なれ
ばフルといふ時の外は觸の借字にはつかひがたきに似たれど卷十一にキミニコ
ヒ浦經居ウラフレレバ二二七〇頁浦經ウラフルココロニニタリ二三〇八頁里トホミ脊浦經コヒウラフル二三三三頁
などフルル、フレにも借用ひたればこゝもげに觸の借字とすべし。さて第三句以下
はフクカゼノイモニフレナバワレニサヘフレとよむべし。○古義の釋は行過ぎた
り。ただ妹に觸れけむがゆかしさに我ニサヘ觸レヨと願へるなり

あすか、がは高河避紫越來、信今夜マコトコヨヒハネズ不明行哉ユカメヤ

飛鳥河高河避紫越來信今夜不明行哉

第二句を舊訓にタカガハトホシとよめるを眞淵はタカガハヨカシに改めたり。又
第三句を略解にコエテキツ、古義にコエコシヲとよめり。案ずるに高河避紫はもと
南川柴避ナヅサヒとありしを南を高に、川を河に誤り柴避を避柴と顛例し更にその柴を紫
に誤れるにあらざるか。河は諸本に川とあり。又紫は柴に作れる本あり。もし南川柴
避の誤ならば越を第二句に附けてナヅサヒコエテキタルヲとよむべし。○四五
を

略解に マコトコヨヒハアケズユカメヤ

古義に マコトコヨヒヲアケズヤラメヤ

とよめり。明を寐などの誤としてマコトコヨヒハネズテユカメヤとよむべきか
やつり河みな底たえずゆく水のつぎてぞこふるこのとしごろを

或本歌曰みをもたえせず

八鈎河水底不絶行水續戀是比歳

或本歌曰水尾母不絶

上三句は序なり。八釣は大和高市郡の地名。〇釣は一本に釣とあり

いその上におふる小松の名ををしみ人に知らえずこひわたるかも

或本歌曰巖の上にたてる小松の名ををしみ人にはいはずこ

ひわたるかも

磯上生小松名惜人不知戀渡鴨

或本歌曰巖上爾立小松名惜人爾者不云戀渡鴨

イソは大石なり。初二はいかにかゝれる序にか。考には「大なる巖上に一つ生たる松はあらはに目に立ものなるを名に顯はる、譬とせり」といひ古義には「小松ノ根といふべきをネとナと音通へば名といへり」といへり。案ずるに巖の上に松の生ひたるはめづらしければ其松に附けたる名ありしによりて名の序とせるならむ。いにしへは今小松といふよりは遙に老大にて樹齡數十年を經其蔭に人の立寄るばかりなるをも小松といひし事卷二(一九八頁)及卷四(七〇二頁)にいへる如し

山河の水陰生やま草のやまミゴモリニオフル草スゲのやまスゲも妹がおもほゆるかも

山河水陰生山草不止妹所念鴨

上三句は序四五は始終妹ガシノバレルとなり。〇水陰を略解にミヅカゲとよみ考と古義とには隱の誤としてミゴモリとよめり。後者に從ふべし。ミゴモリニは水中ニ没シテなり。草を古義に菅の誤とせり

あさば野ナチに立神カムサブル古すがの根の惻隱誰故吾不戀

或本歌云たかば野にたちしなひたる

淺葉野立神古菅根惻隱誰故吾不戀

或本歌云誰葉野爾立志奈比垂

右二十三首柿本朝臣人麻呂之歌集出

古義に第二句の古の上に左を補ひてカムサブルとよめり。もとのまゝにても然よむべし。カムサブルはやがて古くなる事なればなり。〇四五を二註にネモコロタルユエワガコヒナクニとよめり。おそらくは誤字あるべし。〇誰タガを清音のタカに借れるは卷十一(二二四七頁)に枉をマケ(ユフカタ枉テ)に借れると同例なり

正述心緒

吾背子をいまかいまかとまちをるに夜のふけぬればなげきつるかも
吾背子乎且今且今跡待居爾夜更深去者嘆鶴鴨

(玉くしろ)まきぬる妹もあらばこそ夜之長毛うれしかるべき

玉釵卷宿妹母有者許増夜之長毛歡有倍吉

第四句を考にヨヒノナガキモとよみ古義にヨノナガケキモとよめり。ナガケキといふ辭は無し。ヨルノナガキモとよむべし(但考の如くヨヒとよみても可なり)。コソといひてベキと結べるは太古の語法なり。○玉クシロはマキにかゝれる枕辭なり。マキヌルは枕キ寢ルなり。クシロは肘後に纏く金環にて玉クシロは之に玉を箴めたるものなるべき事卷九(一七九一頁)にいへる如し。高力士傳に汝常弄吾臂上雙金環とあり楊太眞外傳に取紅粟玉臂支賜阿蠻また阿蠻因進金粟裝臂環また紅玉支賜妃子とあるは即クシロなり。○古義に釵を釵の誤として釵は釧字と同じくてク

シロなり」と云へれど釵にクシロの義は無し。杜甫の詩に家々賣釵釧とあるは釵と釧と二つならむ

人妻にいふはたが事醉衣乃この紐とけといふはたが言

人妻爾言者誰事醉衣乃此紐解跡言者孰言

第二句のタガ事もタガ言なり。相手を深く咎めてタガイフ言葉ゾといへるなり。○第三句を従来サゴロモノとよめり。げに然よむべけれどサに醉の字を借りたるはいぶかし。否醉にサの音なし。卷七(二六九頁)に作夜フケテホリ江コグナルマツラ船と書ける例あれば醉は作の誤ならむ

かくばかりこひむものぞとしらませば其夜はゆたにあらましものを
如是許將戀物其跡知者其夜者由多爾有益物乎

四五はソノ夜ハユルリトシヨウモノヲといへるなり。○卷十一に

かくばかりこひむものぞとおもはねば妹がたもとをまかぬ夜もありき
とあり

こひつつも後にあはむとおもへこそおのが命を長くほりすれ
戀乍毛後將相跡思許増己命乎長欲爲禮

今は吾は死なむよ吾妹あはずしておもひ渡ればやすけくもなし
今者吾者將死與吾妹不相而念渡者安毛無

卷四に

今は吾はしなむよわが背いけりとも吾によるべしといふといはなくに
とあり。ヤスケクはヤスキ事なり。ヤスクを延べたるにあらず

我背子が將來跡語之夜はすぎぬしゑや更更思許理こめやも

我背子之將來跡語之夜者過去思咲八更更思許理來目八面

第二句は舊訓の如くコムトカタリシとよむべし略解にはキナムトイヒシとよめ
り○シエヤは一種の歎辭なり(一一)○頁參照更更は卷十一(一九七五頁)に
いそのかみふるの神杉かむさびて吾八更更戀にあひにける
といへる例あれどこれも今更の誤ならざるか○シヨリを眞淵は然りの轉

せるなりといひ雅澄は爲損ふ事なりといへれど共に穩ならず又諸書に卷七(一三
五一頁)なるカヒテシ絹ノ商自許理鴨を例に引きたれどそは商ニ懲リツルの誤な
るべき事彼處にいへる如しなほ考ふべし

人言のよこすをききて(玉梓の)道毛不相常云△吾妹

人言之讒乎聞而玉梓之道毛不相常云吾妹

ヨコスは讒スルなり四五を略解にミチニモアハジトイヘルワギモコとよみ宜長
は常云を絶去の誤としてミチニモアハズタエニシワギモとよめり案ずるに常を
上に附け云の下に來を補ひてミチニモアハジトイヒコシワギモとよむべし

あはなくも懈とおもへばいやましに人言しげくきこえくるかも

不相毛懈常念者彌益二人言繁所聞來可聞

懈をウシとよまむは穩ならねど下に懈を海に借りてコシノ懈ノコガタノ懈ノと
書けるを思へばこの懈もなほウシとよむべし○初二は逢ハヌ事ヲダニウシト
思フニとなり

里人もかたりつぐがねよしゑやしこひてもしなむたが名ならめや
里人毛謂告我禰縱咲也思戀而毛將死誰名將有哉

カタリツグガネは我戀ヒテ死ニキトイフ事ヲカタリ繼グベクとなり○タガ名ナ
ラメヤは君ノ名立ナラズヤ然ラバ死ナヌウチニ逢ヘカシとなり○古今集戀二に
こひしなばたが名はたたじ世の中の常なきものといひはなすとも
とあると相似たり

たしかなる使をなみとところをぞ使にやりしいめにみえきや
慳使乎無跡情乎曾使爾遣之夢所見哉

慳は慳の誤ならむ

天地にすこし至らぬますらをと思ひし吾やをごころもなき

天地爾小不至大夫跡思之吾耶雄心毛無寸

初二は天ノ高ク地ノ廣キニコソ少シ及バネ其他ハ物トモ思ハヌといふ意なるべ
し○考略解に卷三に天雲ノムカフス國ノマスヲトイハレシ人ハとあるを引き

たれど、そは遠國ノ武士といふことにてこゝと相與からず(五四四頁参照)

里ちかく家やをるべき此吾目之、人目乎爲乍戀のしげけく

里近家哉應居此吾目之人目乎爲乍戀繁口

家ヤラルベキは家居ヤハスベキとなり。イヘキスルをいにしヘイヘラルといひし
なり(一九一〇頁、一一一五頁、一九二二頁参照)○第三句を從來コノワガメノとよめ
り。此比日之の誤にてコノゴロノとよむべきにあらざるか○第四句を眞淵は人目
毛里乍の誤とせり。おそらくは人目乎候止の誤ならむ○女が里近く家居すれば男
はそを訪ふに人目を伺はざるを得ざるが故にサトチカク家ヤラルベキといへる
なり。略解に「男女近きわたりに家居する故」といへるは非なり

いつは奈毛こひずありとはあらねどもうたてこのごろ戀のしげきも

何時奈毛不戀有登者雖不有得田直比來戀之繁母

初句は古義に奈を志の誤としてイツハンシモとよめるに従ふべし。ウタテは怪シク
なり○卷十一(二二四七頁)に

いつはしもこひぬ時とはあらねども夕かたまけて戀はすべなし
とあり

(ぬばたまの)いねてしよひのものもひに割西胸はやむ時もなし

黒玉之宿而之晚乃物念爾割西胸者息時裳無

割西は舊訓にサケニシとよめり。古義に従ひてワレニシとよむべし。イネテシヨヒ
ノは前夜ノといふ事

みそらゆく名のをしけくも吾はなしあはぬ日まねく年の經ぬれば
三空去名之惜毛吾者無不相日數多年之經者

初句を前註に『名の空までも立のぼる意なり』といへるは非なり。空ヲハシリユクと
いふ意なり。○はやく卷四に

つるぎだち名のをしけくも吾はなし君にあはずて年の經ぬれば
とあり

うつつにも今も見てしがいめのみにたもとまき宿と見者くるしも

或本歌登句云わぎもこそ

得管二毛今見牡鹿夢耳手本纏宿登見者辛苦毛

或本歌登句云吾妹兒乎

今モはタダ今なり。見者を舊訓にミレバとよみ考にミルハとよめり。考に従ふべし
○登は發の誤なり

立而居すべのたどきも今はなし妹にあはずて月のへぬれば

或本歌云君が目みずて月のへぬれば

立而居爲便乃田時毛今者無妹爾不相而月之經去者

或本歌云君之目不見而月之經去者

初句を略解は舊訓に従ひてタチテキルとよめるを古義にはタチテキテとよめり。
卷十なる長歌(二〇八二頁)にも立座タドキヲシラニとあり。ものまゝならばタチ
テキムとよむべけれどタチテキムといはばスベノタドキモ今ハ知ラズとこそい
ふべけれ。されば此歌は下なる

おもひやるすべのたどきも吾はなしあはぬ日まねく月のへぬれば
といふ歌を誤り傳へたるならむ

あはずしてこひわたるとも忘れめやいや日にけにはおもひますとも
不相而戀度等母忘哉彌日異者思益等母

三四の間にムシロといふことを加へて聞かば通すべし
よそ目にも君がすがたを見てばこそ吾戀やまめ命不死者

一云いのちにむかふ吾戀やまめ

外目毛君之光儀乎見而者社吾戀山目命不死者

一云壽向吾戀止目

ミテバは見タラバなり。結句を従来イノチシナズバとよみたれど者を互の誤とし
てイノチシナズテとよまざればと、のはず〇一云のイノチニムカフは卷四(七六
二頁)に

ただにあひて見てばのみこそたまきはる命にむかふわが戀やまめ

とありて命ニ匹敵スルといふ意なり

こひつつもけふはあらめど(玉くしげ)將開明日如何くらさむ

戀管母今日者在目杼玉匣將開明日如何將暮

第四句を略解にアケムアシタヲ古義にアケムアスノヒとよめり。舊訓の如くアケ
ナムアスヲとよむべし。〇如何を従来イカデとよみたれどイカニとよみ改むべし
〇卷十(一九六七頁)に

こひつつも今日はくらしつかすみたつ明日のはる日をいかにくらさむ
とあり

さよふけて妹を念出(しきたへの)枕もそよになげきつるかも

左夜深而妹乎念出布妙之枕毛衣世二嘆鶴鴨

念出を略解にモヒデテ古義にオモヒデとよめり。後者に従ふべし。卷二十なる長歌
に

はるばるに伊弊乎於毛比渥おひそやのそよとなるまでなげきつるかも

とあり。ソヨニはソヨグバカリとなり

ひとごとはまことこちたくなりぬともそこにさはらむ我ならなくに
他言者眞言痛成友彼所將障吾爾不有國

ソコニサハラムはソレニ妨ゲラレムとなり

立居^{クテキム}たどきも不知^{シラニ}わがこころあまつ空なり土はふめども
立居田時毛不知吾意天津空有土者踐鞅

立居は上に立而居とあればタチテキムとよむべし。立チタリシガスワルなり考に
はタチテキル、古義にはタチテキテとよめり。○不知は略解の如くシラニとよむべ
し。古義にはシラズとよめり。○第三句以下卷十一(二三五九頁)に心ソラナリ土ハフ
メドモとあるに似たり

世のなかの人のことばとおもほすな眞^{サネ}曾^ソ戀^{コヒシキ}之^キあはぬ日をおほみ
世間之人辭常所念莫眞曾戀之不相日乎多美

世ノナカノ人ノコトバは即世辭なり。○第四句を從來マコトゾコヒシとよみ、その

コヒシを二註に過去格とせり。宜しく之を支の誤としてサネゾコヒシキとよむべ
し

いでいかにわがここだこふる吾妹子があはじといへる事もあらなく
に

乞如何吾幾許戀流吾妹子之不相跡言流事毛有莫國

イデに二義あり。こゝなるはマアと譯すべく古今集戀一なる

いで我を人なとがめそ大船のゆたにたゆたに物おもふころぞ

のイデ又允恭天皇紀の壓^{イダ}乞^イなどはドウゾと譯すべし。○イカニはココダにかゝれ
るなり。されば上二句の意はマア、ワガドンナニ澤山コフル事ゾとなり。此二句は卷
十一(二二六三頁)なる

いでいかにここだくにわが利心のうするまでもふ戀[△]故

の上四句と同格なり

(ぬばたまの)夜をながみかも吾背子がいめに夢にしみえかへるらむ

夜干玉之夜乎長鴨吾背子之夢爾夢西所見還良武

夢ニシ夢ニシといふべき上のシを省けるなり。ミエカヘルはたびたび見ゆるなり

(あらたまの)年の緒長くかくこひば信わが命全からめやも

荒玉之年緒長如此戀者信吾命全有目八目

年ノ緒ナガクは數年ニ亘リテとなり。第四句は信をサネとよみて七言とすべし從

來マコトとよめり○下の目は面の誤か

おもひやるすべのたどきも吾はなし不相△まねく月の經ぬれば

思遣爲便乃田時毛吾者無不相數多月之經去者

上二五六九頁に

立而居すべのたどきも今はなし妹にあはずて月のへぬれば

とかはれる歌あり。又第三句以下は

つるぎ太刀名のをしけくも吾はなし君にあはずて年のへぬれば(卷四)

みそらく名のをしけくも吾はなしあはぬ日まねく年のへぬれば(此卷)

うつせみのうつしごころも吾はなし妹をあひ見ずて年のへぬれば(此卷)

など相似たるもの多し○オモヒヤルは思ヲ遣リ放ツなり。スベノタドキはただス

べといひタドキといはむにひとし○第四句は宣長の説に従ひて不相の下に日の

字を補ひてアハヌ日マネクとよむべし

朝去而ゆふべは來ます君ゆるゑにゆゆしくも吾はなげきつるかも

朝去而暮者來座君故爾忌忌久毛吾者歎鶴鴨

初句を略解にアシタイニテ古義にアシタユキテとよめり。舊訓の如くアサユキテ

とよむべし。アサはアシタの約なり○君ユエニは君ナルニなり。このユエシクは

イマハシクなり。二度ハ逢ハレヌモノノヤウニとなり

ききしよりものを念へばわが胸はわれてくだけでとごころもなし

從聞物乎念者我胸者破而摧而鋒心無

初句は妹が事ヲ聞キシヨリなり○上二五六八頁にワレニシ胸ハヤム時モナシとあり

人言をしげみこちたみ我妹子にいにし月よりいまだあはぬかも

人言乎繁三言痛三我妹子二去月従未相可母

うたがたもいひつつもあるか吾有者^{ツレナラバ}つちにはおちじ^{ソツニキエツ}空消生[△]

歌方毛曰管毛有鹿吾有者地庭不落空消生

ウタガタはウツナク、決シテ、キツトなどいふ意なり。和名抄に沫雨和名宇太加太とあるとは別語なり。後撰集戀一に

おもひ川たえずながるる水の沫のうたがた人にあはできえめや

とあるは決シテのウタガタと水沫のウタカタと同形異義なれば水ノ沫を決シテの序とせるなり

因にいふ。此歌のウタガタは人ニアハデを越えてキエメヤにかゝれるにて本集卷十七なる

あまごかるひなにあるわれを宇多我多毛ひもときさけておもほすらめや
うぐひすのきなくやまぶき宇多賀多母きみが手ふれず花ちらめやも

と同格なり。このウタガタも紐トキサケテ、君ガ手フレズを越えてオモホスラメヤ、花チラメヤモにかゝれるなればなり

さてウタガタモイヒツツモアルカはキツト妹ガ云ヒツツアルダラウとなり
第三句以下を舊訓にワレナラバツチニハオチジソラニケナマシとよみ考に生を
共の誤としてワレシアレバ、ソラニケヌトモとよみ古義は考に従へり。さて
其意を釋して考に

吾心かくてあるからは打捨る事はせじ命は失ふとも

といひ古義に

吾かくてあるからはたとひそこの命は死とも打捨ることはあるまじきなれば
云々

といへり。案ずるに打捨ツル事ハセジなどいふ意ならばツチニハオトサジとこそ
いふべけれ、オチジとはいふべからず。されば第三句は舊訓に従ひてワレナラバと
よむべし。結句は考の如く空ニケヌトモとよまむかといふに四五は雪によそへて
云へりとおぼゆるに地におちじとするには空に消ゆるより外なければソラニケ

ヌトモとは云ふべからず。必ソラニキエツツとこそ云ふべけれ。されば生を乍の誤としてソラニキエツツ又は空ニケニツツとよむべし。○第三句以下は妹の辭なり。されば一首の意は

妹ハ雪ヲ見テモシ我ナラバ空ニ消エテ地ニハオチジトウツナク云ヒツツアル
ナラム

といへるなり

何日イカラムの時にかも吾妹子が裳引のすがた朝にけに見む

何日之時可毛吾妹子之裳引之容儀朝爾食爾將見

何を舊訓にイカナラムとよめるを古義に卷五に伊可爾安良武日ノトキニカモ云云とあるに據りてイカナラムとよみ改めたり。いづれにても可なり。アサニケニは毎日なり

獨るてこふればくるし(玉だすき)かけず忘れむことはかりもが

獨居而戀者辛苦玉手次不懸將忘言量欲

カケズは心ニカケズにてやがて思ハズシテなり。コトハカリモガは工夫ガホシイとなり

なかなかにもだもあらましを小豆アツキなくあひ見そめても吾はこふるか
中中點然毛有申尾小豆無相見始而毛吾者戀香

モダモアラマシヲは逢見ソメザラマシヲとなり。○アヅキナクはアヂキナクの訛なり(二三八一頁参照)○點は默の誤なり

吾妹子エメルが咲まよびきおもかげにかかりてもとなおもほゆるかも

吾妹子之咲眉引面影懸而本名所念可毛

略解は契沖に従ひてエメルとよみ古義は舊訓に従ひてエマヒとよみ又「エマム」ともよむべし」といへり。宜しくエメルとよむべし。モトナは心外なり

(あかねさす)日のくれ去者ズレガすべをなみ千たびなげきてこひつつぞをる
赤根指日之暮去者爲便乎無三千遍嘆而戀乍曾居

去者を略解にユケバ古義にヌレバとよめり。ヌレバとよみてヌルニと心得べし。晝

といへどもすべあるにあらす日暮れていよいよすべなきなればなり
わが戀はよるひるわかず百重なすころしもへば甚すべなし
吾戀者夜晝不別百重成情之念者甚爲便無

卷四に

三熊野の浦のはまゆふ百重なす心はもへどただにあはぬかも

とあり古義に

モモヘナスはモモ重ニといはむが如し。ナスは常に如クといふ意に用ふれどこ

こは軽く見べし

といへり。ココロシは心ニシなり

いとカガシメニツツのきてうすき眉根をいたづらに令搔管あはぬ人かも

五十殿寸太薄寸眉根乎徒令搔管不相人可母

眉根をかくは人に逢はむ呪なり(二二六九頁参照)卷四に

いとまなく人の眉根をいたづらに令搔乍あはぬ妹かも

とあり○イトノキテを五十殿寸太と書けるその太を眞淵は氏、千蔭は天、雅澄は手
の誤とせり。案ずるに太はテともよむべし(二〇三六頁参照)そのイトノキテは極端
ニといふ事なり(九七二頁参照)○令搔管の下に毛などあらざればカカシメツツモ
とはよみがたきによりて眞淵雅澄はカカシメニツツとよめり

こひこひて後もあはむとなくさ漏心しなくばいきてあらめやも

戀戀而後裳將相常名草漏心四無者五十寸手有目八面

略解にはモル古義にはムルとよめり。モルとよむべし

いくばくもいけらじ命をこひつつぞ吾はいきづく人に知らえず

幾不生有命乎戀管曾吾者氣衝人爾不知所知

第二句は生キテアルマイ命ナルニとなり

ひと國によばひにゆきて太刀が緒もいまだ解かねばさよぞあけにけ
る

他國爾結婚爾行而太刀之緒毛未解者左夜曾明家流

ヒト國はヨソノ國ヨバヒは妻ドヒなり(一八六八頁參照)トカネバはトカヌニなり
古事記なる八千矛神の御歌にタチガヲモイマダトカズテ、オスヒヲモイマダトカ
ネバ云々とあるに據れる事前註にいへる如し

ますらをのさときころも今はなし戀の奴に吾はしぬべし

大夫之聡神毛今者無戀之奴爾吾者可死

第四句を眞淵は戀ノ奴トシテの意とし契沖雅澄は戀ノ奴ノ爲ニの意とせり。後者
に従ふべし。戀ニ死ヌとあらば誰も戀ノ爲ニ死ヌと聞くべきを奴といふ語を挿み
たるによりてきゝまどはるゝなり。○聡は聰の俗字なり

常かくし戀者くるししまらくも心安めむことはかりせよ

常如是戀者辛苦暫毛心安目六事許爲與

戀者は舊訓の如くコフレバとよむべし(略解にはコフルハとよめり)コトハカリセ
ヨを略解に「みづから下知するやうにいひなしたる也」といひ古義に「妹に令^ナせたる
なり」といへり。後者に従ふべし。○卷四に

よそにゐてこふればくるし吾妹子をつぎてあひみむことはかりせよ

又上に

ひとりゐてこふればくるし玉だすきかけずわすれむことはかりもが

とあり

凡爾^{オホロカニ}吾しおもはば人妻にありちふ妹にこひつつあらめや

凡爾吾之念者人妻爾有云妹爾戀管有米也

初句は契沖雅澄に従ひてオホロカニとよむべし。世間並ニとなり(二三七三頁參照)

心には千重に百重におもへれど人目をおほみ妹にあはぬかも

心者千重百重思有杼人目乎多見妹爾不相可母

人目おほみ目こそしぬぶれすくなくも心のうちにわがもはなくに

人目多見眼社忍禮小毛心中爾吾念莫國

目コソシヌブレは所見^ミコソシノベにて逢フ事コソ人目ヲシノビテタマサカナレ
となり。このシヌブは隠れしのぶ意にていにしへは二段活なりしが後に四段活と

なりしなり○第三句以下の意は心ノウチニハココダク思フ事ナルヲとなり。卷十
一(二三四七頁及二三八二頁)に下三句相同じき歌あり

人の見てことどかめせぬいめに吾こよひいたらむ屋戸さすなゆめ

人見而事害目不爲夢爾吾今夜將至屋戸閉勿勤

吾は略解に従ひてワガとよむべし(舊訓にはワレとよめり)○コトドカメは言ニト
ガムルなり。言ヲトガムルにあらず。コトホグ、コトドフなどのコトにおなじ○屋戸
を眞淵は宿と異なればとてヤノトとよめり。古事記に天石屋戸、本集卷四(七九六頁)
に屋戸アケマケテといひてノを添へざる例あればこゝもなほヤドとよみて屋の
戸と心得べし

因にいふ。卷三(四一)○頁なる石屋戸ニタテル松ノ樹、卷五(九六七頁)なる寢屋度マ
デ來立ヨバヒヌは石室の外、寢屋の外なるべし

○卷四(七九六頁)なる家持の歌に

ゆふさらば屋戸あけまけてわれまたむいめにあひ見にこむといふ人を

とあると相似たり。その歌の處に契沖のいへる如く共に遊仙窟の文に今宵莫閉戸、

夢裏向渠邊とあるに據れるなり

いつまでに生かむ命ぞ凡者こひつつあらずば死まさされり

何時左右二將生命曾凡者戀乍不有者死上有

イツマデニはニを省きて心得べし○死を舊訓にシヌル、古義にシナムとよめり。後
者に従ふべし○第三句を舊訓にオホヨソハとよみ二註にオホカタハとよめり。案
ずるに卷十一(二三五四頁)なる凡乃行者不念を二註にオホカタノワザトハ云々と
よめれどこは凡爾妹者の誤としてオホロカニイモハとよむべき事はやく云へる
が如し。又同卷(二三七三頁)なる凡、吾シオモハバを略解にオホカタニとよみたれど
こは古義に従ひてオホロカニとよむべし。此外に集中に凡をオホカタとよむべき
處又オホカタとよめる處は無きやうなり。さればこゝも外の例に従ひてオホロカ
とよまむかといふに然はよみがたければ下に大方ハ何かモコヒム云々とあるを
例にて(又古今集なるオホカタハイキウシトイヒテイザカヘリナム、オホカタハウ
ツセミノ世ゾユメニハアリケル、大方ハ月ヲモメデジなどの例に據りて)なほオホ
カタハとよむべし。そのオホカタハは大體といふ事なり

愛等^{ウツクシトオモフ}念^{ウツギモフ}吾妹^{ウツギモ}乎いめに^{ウツギモ}見ておきてさぐるになきがさぶしさ
愛等^{ウツクシトオモフ}念^{ウツギモフ}吾妹^{ウツギモ}乎夢見而起而探爾無之不怜

初句を略解には例の如くウルハシトとよめり。舊訓の如くウツクシトとよむべし
○第二句を古義に吾念妹乎の誤としてワガモフイモヲとよめり。もとのまゝにて
可ならずや○遊仙窟なる少時坐睡則夢見十娘驚覺攪之忽然空手に據れるにて卷
四(七九五頁)なる家持の歌に

いめのあひはくるしかりけりおどろきてかき探れども手にもふれねば
とあるは此歌に倣へるならむ。サブシは不快といふ事

妹と曰^{イフ}者無^{ナシ}禮^レ恐^{コシ}しかすがにかけまくほしき言にあるかも
妹登曰者無禮恐然爲蟹懸卷欲言爾有鴨

曰者を舊訓にイヘバとよみ雅澄はイフハとよめり。イハムハといふべき處なれば
古義の如くよむべし○第二句を契沖はナメシカシコシとよめるを古義にナメク
カシコシに改めたり。前者に従ふべし。カシコシは勿體ナシなり。シカスガニは然シ

なり。カケマクは云ハマクなり

(玉勝間)あはむと云^{イヒ}者誰なるかあへる時さへおもがくし爲^{スル}
玉勝間相登云者誰有香相有時左倍面隱爲

玉勝間を古くは心得かねたりしを契沖始めて

古事記に無間勝間之小船とあるを日本記には無目籠に作り又無目堅間に作り
て堅間は今之竹籠也と書きたれば勝間は籠にてそを褒めてタマガツマといへ
るなり。又和名集に笞箒賀太美とあるは此語の轉せるなり。而してこゝの玉勝間
はアハムにかゝれり(○撮要)

といひき雅澄は之に基づきて

カタマは組みたる竹の目の堅くしまりたるよりいふ稱にて古代には廣く何に
もいひしを後に籠に限ることゝなりしなり。而してカツマは堅津間の約なり(○
撮要)

といへり。案ずるに堅く編みたるをカタマとはいふべくツを挿みてカタツマとは
いふべからず。さればカタマが原にてそを訛りてカツマともいひしならむ。さてア

ハムにかゝれるは冠辭考にいへる如く籠は蓋と身と合ふが故なり○云者を從來
イフハとよみたれどイヒシハとよむべし。結句は考に従ひてオモガクシスルとよ
むべし。略解にセスとよめるはわろし

うつつか妹が來ませるいめにかも吾香まどへる戀のしげきに

寤香妹之來座有夢可毛吾香惑流戀之繁爾

古義にいへる如く結句を第三句の上に引上げて戀ノシゲキニ夢ニカモ吾香マド

ヘルとして心得べし○イメニカモといひて更にワレカといふべきにあらず。吾香

はおそらくは吾者の誤ならむ。香の字無き本あり○卷十一(二三八九頁)に

いめにだに何かもみえぬ見ゆれども吾かもまどふ戀のしげきに

とあると四五相似たり。又伊勢物語なる

君やこし我やゆきけむおもほえずゆめかうつつかねてかさめてか

と相似たり

大方は何かもこひむ言舉せず妹によりねむ年はちかきを

大方者何鴨將戀言舉不爲妹爾依宿牟年者近侵

オホカタハについて契沖は

大方ノ人ナラバ何かモコヒムとよめる歟。又大底のことわりを思ひて業平の大

カタハ月ヲモメデジとよまれたる如くよめる歟。後の意なるべし

といひ雅澄は前者に従へり。案するに大體といふ事なり。コトアゲセズは何モ云ハ

ズニなり○契沖が「親の約して定め置きたれどまだ童女にて今暫時を待程の歌と

見えたり」といへる如し○侵は異本に綬とあるに従ふべし。綬はクミヒモなれば緒

と同訓としたるなり

ふたりして結びし紐をひとりして吾はときみじただにあふまでは

二爲而結之紐乎一爲而吾者解不見直相及者

勢語に四五をアヒミルマデハトカジトゾオモフと作りかへたり

しなむ命ここはおもはず唯毛妹に不相ことをしぞもふ

終命此者不念唯毛妹爾不相言乎之曾念

ココハはソレハなり。唯毛を考以下にタダニシモとよみたれどニシはよみ添ハが

たし。舊訓に従ひてタダシクモとよみて但シといふ意と見べし。否今但シといふはこのタダシクといふ語の遺れるならむ。○不相は舊訓にアハザルとよめるに従ふべし。古義にはアハナクとよめり。コトヲシヅモフは事ヲ殘念ニ思フとなり。○古今集戀四なる

津の國のなにはおもはず山城のとはにあひみむことをのみこそ
と句格相似たり

幼婦者おなじこころにしまらくもやむ時もなく見なむとぞもふ
幼婦者同情須臾止時毛無久將見等曾念

初句を舊訓にはヲトメゴハとよめり。宣長は

或人説、幼婦者は紐緒之の誤なるべし。古今集にイレヒモノオナジココロニイザムスビテムとあるに同じ

といひ雅澄は之に従へり。案するに者を與などの誤としてヲトメゴトとよむべし。女の歌にて子共ト同ジ心ニワリナクモ云々思フといへるなり。卷二(一七八頁)にふりにし、おみなにしてやかくばかり戀にしづまむたわらはのごと

とあると相似たる所あり

夕さらば君にあはむとおもへこそ日のくるらくもうれしかりけれ

夕去者於君將相跡念許憎日之晚毛悞有家禮

オモヘコソは思ヘバコソ、グルラクモは暮ルル事モなり

ただ今日も君爾波相目跡、人言をしげみあはずてこひわたるかも

直今日毛君爾波相目跡人言乎繁不相而戀度鴨

古義に「タダの言は相目跡の上にうつして心得べし」といへるは非なり。今日を強めてタダ今日といへるなり。明日ヲモ待タダタダ今日といへるなり。モは助辭なり。今モナカヌカ、今モ見テシガなどのモにおなじ。さてタダ今日の語例は卷十二(一〇六二頁)にタダゴヨヒとあり。○第二句を二註共にキミニハアハメドとよみて、略解にアフベケレドモ也といひ古義に之を敷衍して今日モ君ニハ直ニ相見ムスベノアルベキナレドと譯せり。案するに逢ハムトナラバ逢フベケレドの意とすれば人言ヲシゲミ逢ハズテコヒワタルカモと相副はず。又さる意ならばアハバアハメドとい

ふべし宜しく跡を乎などの誤としてアハメヲとよむべし。アハムヲをアハメヲといへるは卷十三にアヒカタラムヲを相語妻遠といへると同例なり。○第四句のシゲミは上に附けて心得べし。此句は範とすべからず。

世間爾戀しげむとおもはねば君がたもとをまかぬ夜もありき

世間爾戀將繁跡不念者君之手本乎不枕夜毛有寸

初句は舊訓にヨノナカニとよめり。然るに略解に

古訓ヨノナカニとあれど解がたし。宣長云「ヨノホドニと訓べし。ヨノホドニは生テ在内ニ也。生涯ノホドニカクコヒムモノトハカネテ思ハザリシカバの意也」といへり

といへり。宜しく此間爾の誤としてコノゴロニとよむべし。下にもコノゴロノマノ戀ノシゲキニとあり。○卷十一に

かくばかりこひむものぞと念はねば妹がたもとをまかぬ夜もありきとあり

みどり兒のためこそ乳母はもとむといへ乳のめや君が於毛もとむら

む

緑兒之爲杜乳母者求云乳飲哉君之於毛求覽

いにしへは母をも乳母をもオモといひ取分きては乳母をチオモといひしなり。記傳卷二十四一四八頁五参照。○古義に「ねびたる女を男のけさうする時其女の自を乳母によそへてよめるなるべし」といへるは非なり。次なると一聯の歌にて男の乳母と稱して妾を納るゝを聞きて外にある女の妬みてよめるなり。即ほぼ考にいへる如し。○杜は社の誤か

くやしきもおいにけるかも我背子が求むる乳母にゆかましものを

悔毛老爾來鴨我背子之求流乳母爾行益物乎

二三の間にモシ老イザリセバといふことを補ひて聞くべし

うらぶれてかれにし袖を又まかばすぎにし戀也みだれこむかも

浦觸而可例西袖叫又卷者過西戀也亂今可聞

ウラブレテは感傷シテにて又マカバにかゝれるなり。從來此句をカレニシにかけ

て心得たりしが故におちつかざりしなり○戀也は戀之の誤ならむ。ヤといひて更にカモとはいふべからざればなり。四五は契沖のいへる如く戀を人に擬して一タビ行過ギタ戀ガ又亂レテ歸來ヨウといへるなり

各寺師人死爲良思妹にこひ日にけにやせぬ人にしらえず

各寺師人死爲良思妹爾戀日異羸沼人丹不知所

初二を二註共にオノガジシ人シナスラシとよみたれどカクシツツ人シニスラシなどあらでは義通せず。おそらくは各寺師は各師乍又は各侍乍の誤ならむ。シニスラシはシヌラシにおなじ。卷四(七〇六頁)に戀ニモゾ人ハシニスルとあるも死ヌルなり○人ニシラエズの人ハ相手なり

夕夕吾たちまつに若雲君來まさずばくるしかるべし

夕夕吾立待爾若雲君不來益者應辛苦

夕夕を舊訓にヨヒヨヒニとよめるを考略解にユフベユフベと改めたり。いづれにてもあるべし○吾はワガとよむべく第三句は古義に従ひてケダシクモとよむべし

し(略解にはワレとよみモシクモとよめり)

いける代に戀ちふものをあひみねば戀中にも吾曾くるしき

生代爾戀云物乎相不見者戀中爾毛吾曾苦寸

上三句は始メテノ戀ナレバといふ意、アヒは添辭なり○戀中を舊訓にコヒノウチ、考にコヒノナカ、古義にコフルウチとよめり。考に従ふべし○吾曾を從來ワレゾとよみたれどワガゾとよみてワガ戀ゾの略とすべし○上三句の語例は卷四(七九七頁)に

いける代に吾はいまだ見ずことたえてかくおもしろくぬへるふくろはとあり

おもひつつをればくるしもぬばたまのよるに至者吾こそゆかめ

念管座者苦毛夜于玉之夜爾至者吾社湯龜

至者を考以下にナリナバとよめり。イタラバともよむべけれど卷二(二七七頁)なる高市皇子尊殯宮之時歌にユフベニナレバを暮爾至者と書ける例あればなほナリ

ナバとよむべし○女の歌なり。手は千の誤なり

ころろにはもえておもへど(う)つせみの(人)目をしげみ妹にあはぬかも
情庭燎而念杼虚蟬之人目乎繁妹爾不相鴨

上二五八三頁にも

心には千重に百重におもへれど人目をおほみ妹にあはぬかも
とあり

相おもはずきみは雖座かたこひに吾はぞこふる君が光儀
不相念公者雖座肩戀丹吾者衣戀君之光儀

雖座を舊訓にマセドモ考にイマセドとよめるを略解古義にマサメドと改めてイ
マストラメド也といへり。マサメドとイマストラメドとは同じからず。さてこゝはイマ
セドとよむべし○結句を従来スガタヲとよめり。宜しくスガタニとよむべし

(味澤相)目にはあけどもたづさはりことどはなくもくるしかりけり
味澤相目者非不飽携不問事毛苦勞有來

味澤相は古義にウマサハフとよめる事はやく卷九(一八五一頁)にいへり。顔をば朝
夕に見れど親しくかたらふ折のなきを嘆きたるなる事前註にいへる如し○非不
飽をアケドモとよませたる、めづらし

(あらたまの)年の緒長くいつまでかわがこひをらむいのち知らずて
璞之年緒永何時左右鹿我戀將居壽不知而

結句はイツマデ生キム命トモ知ラズシテとなり

今は吾はしなむよわがせ戀すれば一夜一日もやすけくもなし
今者吾者指南與我兄戀爲者一夜一日毛安毛無
上二五六四頁にも

今は吾はしなむよ吾妹あはずしておもひわたればやすけくもなし
とあり

しろたへの袖をりかへしこふればか妹がすがたのいめにしみゆる
白細布之袖折反戀者香妹之容儀乃夢二四三湯流

卷十一(二五二一頁)にも

吾妹兒にこひてすべなみしろたへの袖かへししはいめに見えきや
吾背子が袖かへす夜のいめならしまことも君にあへりしごとし
とあり

人言をしげみ毛人髪三わがせこを目にはみれどもあふよしもなし
人言乎繁三毛人髪三我兄子乎目者雖見相因毛無

契沖のいへる如く毛人は蝦夷にて蝦夷は毛髪多ければコチタシを毛人髪と戯れ
書けるなり

戀といへば薄事有しかれども我は忘れじこひはしぬとも
戀云者薄事有雖然我者不忘戀者死十方

第二句を略解にウスキコトナリとよみて「有をナリとよむは例あり」といへり。げに
近くは下にも人妻ナリトキケバカナシモを人妻有跡と書けり。薄は考に従ひてア
サキとよむべし。後にも然よむべき所あり。事は言の借字なり。結句はコヒシヌトモ

にハを挿めるなり。○考以下に卷十一(二三八二頁)なる言ニイへバ耳ニタヤスシ、卷
十五なる旅トイへバ言ニヅヤスキなどを例に引きたり

中々に死者やすけむいづる日の入る別しらぬ吾しくるしも
中中二死者安六出日之入別不知吾四久流四毛

死者を舊訓にシナバとよめるを略解にシニハと改めたるは却りてわろし。卷十七
にもナカナカニ之奈婆夜須家牟とあり。○三四は朝夕ノ別ヲ知ラヌとなり。語例は
卷一(一二頁)にカスミタツナガキ春日ノ、クレニケル和豆肝シラズ、卷十一(二三五四
頁)に年月ノユクラム別モオモホエヌカモなどあり

おもひやるたどきも我は今はなし妹にあはずて年のへゆけば
念八流跡状毛我者今者無妹二不相而年之經行者

上(二五七四頁)にも
思やるすべのたどきも吾はなしあはぬ日まねく月のへぬれば
とあり

わがせこにこふとにしあらし小兒ミドリゴの夜なきをしつついねがてなくは
吾兄子爾戀跡二四有四小兒之夜哭乎爲乍宿不勝苦者

小兒を舊訓にミドリゴとよめるを雅澄は齊明天皇紀の御歌にウツクシキアガワ
カキコヲオキテカユカムとあるに據りてワカキコとよみ改めたり。もとのまゝに
て可なり○イネガテナクハは寐敢へヌ事ハとなり。初句の前に我如クといふこと
を加へて聞くべし

我命ワガイシチ之ながくほしけく偽をよくする人を執許トラバカリ乎

我命之長欲家口僞乎好爲人乎執許乎

ホシケクはホシキ事ハとなり。古義に之の字を乎に改めたるはいみじきひが事な
り。命ヲホシキといふべけむや○結句を舊訓にトラフバカリヲとよめるを略解に
執は報の誤ならむといへるは非なり。人乎ムクユとはいふべからざる故なり。案ず
るに結句はトラムバカリヲとよみて捕へム爲ノミヅといふ意とすべし

人言をしげみと妹にあはずしてこころのうちこころにこふるこのごろ

人言繁跡妹不相情裏戀比日

卷九に

いそのかみふるのわさ田の穂にはいすこころのうちこころにこふるこのごろ
といふ歌あり。四五今と相同じ○此歌

人言繁跡妹不相情裏戀比日

と書けるによりて眞淵は人麻呂集の書體なれば彼集の中へ移すべしといへり

(玉梓の)君が使をまちし夜のなごりぞ今もいねぬ夜のおほき

玉梓之君之使乎待之夜乃名擬其今毛不宿夜乃大寸

今モ寢ヌ夜ノ多キハ君ガ使ヲ待チシ夜ノナゴリゾと顛倒して心得べし。但男なら
ぬ其使を待つとて夜寢ざりし趣によめるは穩ならず。されば此歌は卷十一なる
夕さればきみ來まさむとまちし夜のなごりぞ今もいねがてにする
を傳へ誤れるならむ

(玉梓の)道にゆきあひてよそ目にも見者見者よき子をいつとか待たむ

玉梓之道爾行相而外目耳毛見者吉子乎何時鹿將待

見者を略解にミルハとよめるはわろし。舊訓の如くミレバとよむべし。○結句はイツ得テムトカ待タムとなり

おもふにしあまりにしかばすべをなみ吾はいひてきいむべきものを

或本歌曰門にいでてわがこいふすを人見けむかも

可云すべをなみいでてぞゆきし家のあたり見に

柿本朝臣人麿歌集云にほ鳥のなづさひこしを人見けむかも

念西餘西鹿齒爲便乎無美吾者五十日手寸應忌鬼尾

或本歌曰門出而吾反側乎人見監可毛可云無乏出行家當見

柿本朝臣人麿歌集云爾保鳥之奈津柴比來乎人見鴨

結句は云フヲ忌ムベキモノヲとなり。卷十一にも

こもり沼のしたゆこふればすべをなみ妹が名のりつゆゆしきものを(二二九一頁)

こもりぬのしたにこふればあきたらず人に語りついむべきものを(二四五九頁)とあり

或本歌のコイフスはねころぶ事なり。此歌は別の歌なり。左註とすべきにあらず可云は一云の誤なり。諸本に一云とあり。此歌は卷十一(二三六四頁)に

おもふにしあまりにしかばすべをなみいでてぞゆきし其門を見にとあると一つ歌なり

人麿歌集なるもはやく卷十一(二三三三頁)に

おもふにしあまりにしかばには鳥のあなやみこしを人みけむかもと第四句のみ少しかはりて出でたり

明日者その門ゆかむいでて見よ戀有すがたあまたしるけむ

明日者其門將去出而見與戀有容儀數知兼

初句を舊訓にアケムヒハとよめるを古義にアスノヒハに改めたり。ソノ門はこゝにては汝ガ門といはむにひとし。○戀有を從來コヒタルとよみたれどコヒタルスガタと云はむ事穩ならず。恐らくは戀爲の誤ならむ。爲と有とは往々相誤れり。アマ

タシルケムは頗イチヅルカラムとなり○住吉物語なる

君が門今ぞすぎゆくいでて見よ戀する人のなれるすがたを

は此歌を翻案せるなり

得田價異ウタケこころいぶせしことはかりよくせわがせこあへる時だに

得田價異ウタケ心鬱悒事計吉爲吾兄子相有時谷

初句を雅澄がウタテケニとよめるはいみじき發見なり。但「ウタテ殊更ニの意なり」といへるは非なり。ウタテもケニも共に怪シクといふ事なり○イブセシはサツバリとせぬなり。コトハカリは先々の分別なり。ヨクセは今ならばヨクセヨといふべし

吾妹子が夜戸出のすがた見てしよりこころ空なりつちはふめども

吾妹子之夜戸出乃光儀見之從情空成地者雖踐

卷十に朝戸出ノキミガスガタヲヨク見ズテとあり○古義に「夜ごめにいでてかへるを夜戸出といふならむ」といへるは非なり。ただ夜外に出づる事なり。四五の語例

は上二五七二頁にワガ心アマツ空ナリツチハフメドモとあり

つば市のやそのちまた爾ニたちならし結紐ムスビをとかまくをしも

海石榴市之八十衢爾立平之結紐乎解卷惜毛

契沖の考に

海ウミ石榴市イブキといふ處大和國に三處(山邊郡、高市郡、城上郡)豊後に一處あり。今よめる

は山邊郡にあるか(○撮要)

といへり。又雅澄は「そのちまたに立平し」は男女集りて歌場ウタガキにたてる間をいふなるべし」といへり○第二句の爾は乎の誤ならざるか○第四句の結を從來ムスビシとよめり。さて略解に

これは男女集りて歌垣する時結びし紐をいふなるべし。はじめ君ならではとかじと結てし紐を其男今は絶たれど又他し男の爲に解かんは心ゆかぬよし也といひ古義に

歌意は海石榴市のちまたに立て君と二人して結びし紐をふたゝび他し人に解せじとちぎりがためてしものを今は其男は心がはりしたれど吾はこと男の爲

に解むことは心ゆかず、さてもをしき事ぞとなり
といへり。此は上二五八九頁に

ふたりしてむすびし紐をひとりして吾はとき見ただにあふまでは
とあるを踏みていへるなるべけれど、ただ結紐乎とあるを二人シテ結ビシ紐とは
釋くべからず。又ムスビシヒモとよむべきは

結之紐乎トクハカナシモ(卷八二六二)

フタリシテ結之紐乎(此卷九五八)

とありて

結紐、解日遠(卷十一六四〇)

とあるはユヘルヒモとよむべく又二註にもユヘルヒモとよめり。されば今の結紐
乎もムスベルヒモヲとよみてカネテ結ベル紐ヲ男ニ挑マレテ解カムガ惜シとい
ふ意と見るべし

吾^{ワガ}齡^{ヨハヒ}之^ノお^ハと^ロへぬれば(しろたへの袖の)なれにし君^{キミ}乎^ヲ母^{ハハ}准^シ其^ノ思^ヒ

吾齡之衰去者白細布之袖乃狎爾思君乎母准其念

初句を略解にワガヨハヒシ、古義にアガヨハヒノとよめり。之[△]を衍字とすべし。○シ
ロタヘノソデノはナレニシにかゝれり。かのカラゴロモ著ツツナレニシと同類の
枕辭なり。○結句を舊訓にキミヲシゾオモフトよめり。眞淵は母准を羅の誤として
キミヲラゾオモフトよみ、雅澄は母を衍とし准を進の誤としてキミヲシゾモフト
よみ、字音辨證(上卷二二頁)には准にシの音あればシに借りたるなりといへり。後
者に従ふべし。ナレニシ君ヲシゾモフトは久シクシタシミシ君ヲナツカシト思フト
なり

君にこひわがなく涙しろたへの袖さへ所^ズ漬^テせむすべもなし

戀君吾哭涕白妙袖兼所漬爲便母奈之

所漬を舊訓にヒヂテ、考にヌレテ、古義にヌレヌとよめり。考に従ふべし。○第二句は
ワガナク涙ニのニを省けるなり。そのニは後世ならば省くべからざる事勿論なり
今よりはあはじとすれやしろたへのわがころもでのひる時もなき
從今者不相跡爲也白妙之我衣袖之干時毛奈吉

さる俗信ありしによりてよめるならむ。スレヤはスレバニヤにて云々スル前兆ニヤとなり

夢可登情班月數多イメニカトココロマドヒヌマネク二ニかれにし君のことの通者カコト

夢可登情班月數多二千西君之事之通者

初句を舊訓にユメカトモとよみ、眞淵はイメカトと四言によみ、雅澄は夢可毛登の脱字としてイメカモトとよめり。宜しくイメニカトとよむべし。上二五八八頁にもイメニカモを夢可毛と書けり。○情班を舊訓にオモヒワカメヤとよめるを眞淵は情怪の誤としてココロアヤシモとよみ、雅澄は情遮の誤にてココロマドヒヌならむかといへり。げにココロマドヒヌとあるべき處なり。但字はなほあるべし。下にもココロマドヒヌとよむべき處あり。○略解古義には第二句の二を衍字としてツキマネクとよめり。元暦校本にも二の字なし。もとのまゝならば考の一訓にツキサハニとよめるに従ふべし。○通者を二註にカヨフハとよめり。舊訓に従ひてカヨヘバとよむべし。コトノカヨヘバは便ノアレバとなり

(あらたまの)年月かねて(ぬばたまの)いめにぞ所見君がすがたは

未玉之年月兼而烏玉乃夢爾所見君之容儀者

所見を二註にミユルとよめり。宜しくミエシとよむべし。二註に「年月カネテは年月カサネテといふに似たり」といへるは非なり。カネテ久シクといへるなり。始めて逢ひし時の歌なり。○アラタマを未玉と書けるを古義に「義を以て書るにて未理玉の謂なり」と云へり

今よりはこふとも妹にあはめやも床の邊さらざいめにみえこそ

從今者雖戀妹爾將相哉母床邊不離夢所見乞

旅立つ時の歌なり。卷十一にも

里とほみこひうらぶれぬまそかがみ床のへさらずいめにみえこそとあり

人の見て言どかめせぬいめにだにやまず見えこそ我戀やまむ

或本歌頭云人目おほみただにはあはず

人見而言害目不爲夢谷不止見與我戀將息

或本歌頭云人目多直者不相

四五の間にサラバといふことを加へて聞くべし。○上(二五八四頁)にも人の見て言どかめせぬいめにわがこよひいたらむ屋戸さすなゆめとあり

うつつには言絶有コトタエニケリいめにだにつぎてみえコト而ただにあふまでに

現者言絶有夢谷嗣而所見而直相左右二

第二句を略解にはコトタエニタリ古義にはコトタエニケリとよめり後者に従ふべし。有はケリともよむべし(一四六〇頁参照)○而は諸本に與とあり

うつせみのうつしごころも吾はなし妹をあひ見ずて年のへぬれば
虚蟬之宇都思情毛吾者無妹乎不相見而年之經去者

此歌の初句を略解には枕辭とし古義には枕辭にあらずといへり。案するに此歌又

うつせみの命ををしみ(四三頁)

うつせみのかれる身なれば(五六六頁長歌)

うつせみの妹がゑまひし(二四一五頁)

などのウツセミノは現ウツシキ身ノ即生キタル身ノといふ意とおぼゆ○類歌は

つるぎだち名のをしけくも吾はなし君にあはずて年のへぬれば(卷四)

ますらをのうつし心も吾はなしよるひるといはすこひしわたれば(卷十一)

おもひやるたどきも我は今はなし妹にあはずて年のへゆけば(此卷)

などあまたあり

うつせみの常の辭とおもへどもつぎてしきけば心ココロヲヒヒ遮ヒ焉

虚蟬之常辭登雖念繼而之聞者心遮焉

このウツセミノも枕辭にあらずウツシキ身ノ即世ニアル人ノといふこととおぼゆ。卷十四にもウツセミノヤソコトノへハシダクトモとあり○常ノコトバは所謂世辭にて上(二五七二頁)に世ノ中ノ人ノコトバとあるにおなじ○結句を舊訓にココロハナギヌとよめり。それに基づきて眞淵は遮を慰の誤とせり。之に反して久老は遮を迷の誤としてココロマヨヒヌとよみ雅澄は之をマドヒヌと修正せり。雅澄の訓に従ふべし。はやく卷四(七三三頁)に

ただ一夜へだてしからにあらたまの月か經ぬると心ココロヲヒシメ遮ササとあり。又上二六〇八頁にもココロマドヒヌとよむべき處あり

しろたへの袖不數而宿カヘテホスぬばたまのコよひは早もあけばあけなむ

白細之袖不數而宿烏玉之今夜者早毛明者將開

略解に而を衍字とし又眞淵に従ひて數を卷の誤としてソデマカズヌルとよめり。古義にはもとのまゝにてソデカレテヌルとよめり。共にうべなひがたし。數を更などの誤として袖不更而宿とよむべくや。カヘテはカハシテなり

(しろたへのたもと)ゆたけく人のぬるうまいはねずやこひわたりなむ

白細之手本寛久人之宿味宿者不寢哉戀將渡

古義に「タモトユタケクはこゝろよく寝る形容なり」といへるは非なり。シロタヘノタモトまでが枕辭(序)にて上なるシロタヘノ袖ノナレニシと同格なり。ネズヤは寢ズニヤなり

寄物陳思

かくのみにありける君を衣ならば下にも著むとわがもへりける

如是耳在家流君乎衣爾有者下毛將著跡吾念有家留

初二はカク心淺キ君ナルヲとなり。モヘリケルは思ヒタリケル事ヨとなり。〇上二五五四頁にも

人言のしげかる時をわぎもこが衣にありせばしたに著ましを

とあり

つるばみのアハセノキヌノウラ袷ナ爾ラ爲者われしひめやも君が來まさぬ

椽之袷衣裏爾爲者吾將強八方君之不來座

眞淵以下初二を序とせり。さて眞淵はもとのまゝにて舊訓の如くウラニセバとよみ、宣長は爲を有の誤としアハセノコロモウラニアラバとよみて「ウラとは疑ひ危む事なり」といひ、雅澄は裏志有者の誤とせり。案ずるに爲を有の誤としてウラナラバとよむべし。初二は序にあらず。抑ツルバミノキヌは卷七に

つるばみの衣きる人は事なしといひし時よりきほしくおもほゆ(一三九〇頁)
つるばみのときあらひ衣のあやしくも殊にきほしきこのゆふべかも(一三九二
頁)

とありてドングリノカサにて染めたる賤者の衣なり。其裕の衣は裏はた薄ければ
今はモシウスキ御心ナラバといふことをよそへてツルバミノアハセノ衣ノウラ
ナラバといへるなり。略解に「いやしき人の我著る衣もてよめり」といへるは非なり
○第四句の語例は卷四(七六三頁)にイナトイハバシヒメヤ吾背とあり
くれなるの薄染アハセごろもあさらかにあひ見し人にこふるころかも

紅薄染衣淺爾相見之人爾戀比日可聞

薄染を舊訓にウスヅメとよみ眞淵以下はアラヅメとよめり。アサラカニの序なれ
ばアサヅメとよむべし。上(二五九八頁)にもアサキコトナリを薄事有と書けり。初二
は序なり。アサラカニは深ク心モ留メズシテとなり

年之へば見つつしぬべと妹がいひしころもの縫目みればかなしも

年之經者見管偲登妹之言思衣乃縫目見者哀裳

之はシとよむべし(從來ノとよめり)逢ハズシテ年經ナバとなり

つるばみの一重ごろものうらもなくあるらむ兒ゆゑこひわたるかも
椽之一重衣裏毛無將有兒故戀渡可聞

初二は序なり。ウラナシを契沖は何心モナシといふに同じといひ雅澄は「心の表裏
なく打解たるをいへり」といへり。案ずるに今無心といふにひとし

(ときぎぬの)おもひ亂れてこふれども何の故ぞととふ人もなし

解衣之念亂而雖戀何之故其跡問人毛無

二註に人を戀の相手としたるは従はれず○卷十一(二四〇一頁)にも
ときぎぬのおもひ亂れてこふれどもなにしの故ととふ人もなし

とあり

桃花モズ褐あさらのころもあさらかにおもひて妹にあはむものかも

桃花モズ褐淺等乃衣淺爾念而妹爾將相物香裳

桃花褐は桃色に染めたる布衣なり。舊訓に三字をアラゾメとよみ江家次第にも荒染とあれど紀、令、式などの古書には桃染又は退紅と書きたればいにしへはモモゾメといひしを後にアラゾメといふやうになりしならむ。又退紅は音にて唱へしならむ。さればこゝもモモゾメノとよむべし。○アサラノコロモは色淺き衣にてやがて淺染衣なり。後世ならばアサラナルコロモといふべし。初二は序なり。○略解に逢るを悦てよめる也といへるはカヤウニ逢フ事ノ出來タノハヨホドアリガタイト思ハネバナラヌといふ意に取れるにやいぶかし。古義に「なみなみに思ひたるのみにてあはるゝものかは」と釋せるはアハムモノカモを逢ハレムモノカハと心得たるなり。案するにこは第三者たとへば媒が男に云へるにて深ク思入リテコソアフベケレ、然アサハカニ思ヒテ逢ハムモノカハといへるなり。

おほきみの鹽やくあまのふぢごろも穢者雖爲いやめづらしも

大王之塩燒海部乃藤衣穢者雖爲彌希將見毛

上三句は序、オホキミノは御料ノといはむにひとし。第四句を略解にナレハスレドモ、古義にナルトハスレドとよめり。古義に従ふべし。イヤは後世のナホなり(九〇二

頁参照)○卷十一(二四〇二頁)に

くれなるのやしほのころもあさなさななるとはすれどいやめづらしも
とあり

あかぎぬの純裏衣長欲わがもふきみがみえぬころかも

赤帛之純裏衣長欲我念君之不所見比者鴨

「クレナキといはず赤帛とあるは緋色の衣なり」と眞淵いへり。○第二句を眞淵はヒトウラゴロモとよみ千蔭はヒタウラゴロモとよみ雅澄は卷十六にユフカタギヌ氷津裡ニヌヒテとあるに據りてヒツラノコロモとよめり。ノの辭ほしき處なれば古義の訓に従ふべし。さてそのアカギヌノ純裏衣を眞淵以下「表裏同じ赤色なるをいふ」といへれど少くともヒタウラ(或はそを略してヒツラ)とよみて表裏同色の意とはすべからず。アカギヌノヒツラは赤帛ノトホシ裏ならむ。○初二はナガクにかれる序なり。長欲を舊訓にナガクホリとよめるを略解に長を著の誤としてキマクホリとよめり。宜しくものまゝにてナガクホリとよむべし。さてナガクホリワガモフ君はワガ長クホリ思フ君にて長ク通ウテ來イト思フ男なり

(眞玉つく)をちこちかねてむすびつるわが下紐のとくる日あらめや

眞玉就越乞兼而結鶴言下紐之所解日有米也

眞玉ツクヲチコチカネテはやく上(二五五四頁)に見えたり○トクルを所解と書けるは上(二五五二頁)に人ノミルを所見と書けると同例なり

むらさきの帯の結もときも見ずもとなや妹にこひわたりなむ

紫帶之結毛解毛不見本名也妹爾戀度南

帯は衣の上の帯なり。眞淵以下した紐の事としたるは非なり。帯ノムスビモのモはダニなり。下紐に對してモといへるなり○略解に「トキモ見ズの見にこゝろなし」といへるに對して古義に「トキアケズといはむが如し。見は開といふに當れり」といへり。略解に従ふべし。トキモ見ズはトキモ見ズシテなり○四五は心外ニ空シク妹ニ戀渡ラムカといへるならむ

(こまにしき)紐の結もときさけずいはひてまでどしるしなきかも

高麗錦紐之結毛解不放齊而待杼驗無可聞

結べる紐を解かざれば戀ふる人に逢ふなどいふ俗信ありてそれによりてよめるなり。イハヒテは自祝シテなり。シルシはイハヒノ驗なり。二註に「いはひつゝしみて待には神のしるしあるべき事なるに」など釋せるは誤解なり○この紐も衣の紐なり

むらさきの我下紐の色にいでず戀可毛將瘦あふよしをなみ

紫我下紐乃色爾不出戀可毛將瘦相因乎無見

二註に初二をイロニイツにかゝれる序とせるは非なり。色のみにかゝれるなり○三四は色ニハ出デズシテ戀瘦セムカといへるにや。少し穩ならず。第四句は戀可將度の誤にあらざるか

何故かおもはずあらむ(紐の緒の)心に入りてこひしきものを

何故可不思將有紐緒之心爾入而戀布物乎

折り曲げたる紐の端を係蹄にとほすを心ニ入ルルといへばヒモノ緒ノを心ニ入リテの枕辭とせるならむ。さて心ニ入リテはオマヘガ私ノ心ニハヒリテとなり○

考に『男の思ハズヤなどいふに答へしならむ』といへる如し
まそかがみ見ませ吾背子わが形見將持辰爾將不相哉

眞十鏡見座吾背子吾形見將持辰爾將不相哉

上三句はコノマソ鏡ヲ我形見ト見マセソノ形見ヲ云々といへるならむ○第四句を舊訓にモタラムトキニとよめるを宣長は辰爾を君爾の誤とせり將持度爾などの誤にあらざるか○結句は古義に従ひてアハザラメヤモとよむべし(略解にはアハザラムカモとよめり)

(まそかがみ)ただ目に君を見てばこそ命にむかふ吾戀やまめ

眞十鏡直目爾君乎見者許増命對吾戀止目

このマソカガミは見にかゝれる枕辭なり。ミテバコソは見タラバコソなり○上二五七〇頁に

よそ目にも君がすがたを見てばこそいのちにむかふわが戀やまめ
又卷四に

ただにあひて見てばのみこそたまきはる命にむかふわが戀やまめ
とあり

(まそかがみ)見あかぬ妹にあはずして月のへぬれば生友名師

犬馬鏡見不飽妹爾不相而月之經去者生友名師

結句を舊訓にイケルトモナシとよめるを契沖は『イケルトモナシとよむべし』といへり。こは卷十九に伊家流等毛奈之とあるによれるならむ。宣長も亦『イケルトモナシとよみてイケル利心モナシの意とすべし』といへれどなほ舊訓に従ふべし(一〇五六頁参照)

はふりらがいはふみもろのまそかがみかけて偲あふ人ごとに

祝部等之齊三諸乃犬馬鏡懸而偲相人毎

上三句は序にてイハフはイツキ祭ルといふ事、ミモロは神殿なり○第四句の偲を從來シヌビツとよめり。さて四五の意を契沖は『似たる人同じ程にうるはしき人或はしなかつたの及ばぬ人それぞれに付て思ひ出て偲ぶとなり』といひ宣長雅澄等

皆此説に同意せり。案ずるに契沖等はアフ人毎ニカケテ妹ヲシヌビツと解したるならめど集中にカケテシヌビツ、カケテシヌバムなどいへるは皆相手ノ人(又は物)ヲ心ニカケテシヌブといへるなり。さればこゝのカケテシヌビツのみを別義とすべからず。更に案ずるに偲はこのままにてか又は上に將の字を補ひてシヌバムとよむべし。さて四五を妹ヲバ逢見ル人毎ニ心ニカケテ偲バムと心得べし。語例は卷十七なる二上山賦の末にイニシヘユイマノヲツツニ、カクシコソ見ルヒトゴトニ、カケテシヌバムとあり

針はあれど妹之なければつけめやと吾をなやまし絶ゆる紐のを

針者有杼妹之無者將著哉跡吾乎令煩絶紐之結

妹之は舊訓に従ひてイモシとよむべし(古義にはイモガとよめり)○古人が紐の緒の絶ゆるを忌みし事上(二五五頁)にいへる如し。さて此歌は紐の緒をいちわろき人に擬したるなり○卷二十にくさまくらたびのまるねのひもたえばあが手とつけろこれのはるもしとあり○結は緒の誤なり

(こまつるぎ)己之景迹故外耳見乍哉君乎戀渡奈牟

高麗劍己之景迹故外耳見乍哉君乎戀渡奈牟

二註共に第二句をワガココロユエとよめり。己之はナガとよむべき事卷九なるツルギダチ己之心柄オツヤコノ君(一七四七頁)并に己父ニ似テハナカズ己母ニ似テハナカズ(二七七四頁)の處にいへる如くなれどこゝは卷二なるコマツルギワザミガ原ノを例としてワガとよむべくや。故はむしろカラとよむべし。ワガココロカラ云々は云出セバヨイニ云出シモセズニとなり○外耳は卷十五に與曾能未爾ミツツスギユク、卷十九に余曾能未爾ミツツアリシヲ、卷二十に余曾爾能美ミテヤワタラモとあればヨソノミニともヨソニノミともよむべし。君乎の乎は爾の誤ならむつるぎ太刀(名)のをしけくも吾はなしこのごろの間の戀のしげきに

劍太刀名之惜毛吾者無比來之間戀之繁爾

卷四に四五のみ君ニアハズテ年ノヘヌレバとかはれる歌あり

(梓弓)未はし知らずしかれどもまさかは君により西ものを

一本歌云梓弓末のたづきはしらねども心は君によりにしもの

梓弓末者師不知雖然眞坂者君爾縁西物乎

一本歌云梓弓末乃多頭吉波雖不知心者君爾因之物乎

末ハシのシは助辭なり○マサカは現在なり。これに對して未來を末ともオクともいふ。卷十四に二三の例あり○ヨリニシの主格は我心なり。そのヨリニシはヨリタルとあるべきなり。西は在などの誤にあらざるか○男の何とか云ひしに答へたるなり○君は二三の本に吾となり。之によらば男の歌とすべくイカデ逢ハズナリニケムといふ事を補ひて聞くべし
一本の歌は別の歌と認むべし

(梓弓)ひきみ縦見おもひみて既心はよりにしものを

梓弓引見縦見思見而既心齒因爾思物乎

縦見を舊訓にユルベミとよめるを契沖はユルシミとよみ眞淵以下ふたゝびユル

ベミとよめり。卷十一(二四一四頁)なる梓弓引見弛見こそヒキミユルベミとよむべけれ。縦はユルベとはよみがたき上にハリに對してはユルベといひヒキに對してはユルシといはむが辭の常なれば契沖の訓に従ふべし。さてヒキミユルシミは引イタリ放ツタリなり○二三はサマザマニ考へテといふことを弓の縁にていへるなり○既を從來スデニとよみたれど卷十七なる天ノ下スデニオホヒテフル雪ノなど古書にスデニといへるは全クといふことなればこゝの既はハヤクとよむべし。ヨリニシは弓の縁語なり

梓弓ひきて不縦ますらをや戀ちふものをしぬびかねてむ

梓弓引而不縦大夫哉戀云物乎忍不得牟

この梓弓は枕辭にあらず。さてアツサ弓ヒキテユルサヌは力満ちたる丈夫の形容なり○卷十一(二四〇八頁)に初二のみツルギダチ身ニハキソフルとかはれる歌あり。自勵して我大丈夫ヤハ戀チフモノニ堪へ得ザルベキといへるなり。ヤ、ヤ、カネテムはカネテアラムヤハなり(二三六〇頁參照)

(梓弓)末中一伏三起、不通有之、君にはあひぬ嘆はやめむ

梓弓末中一伏三起不通有之君者會奴嘆羽將息

末中一伏三起を舊訓にスエノナカメテとよめるを宣長はスエノナカゴロとよみ改めたり。卷十三にネモコロゴロニを根毛一伏三向凝呂爾と書ける一伏三向と齊しければげにスエノナカゴロとよむべし(一九三八頁參照)六帖にもかくこひむものとしりせば梓弓すゑのなかごろあひみてましをとあり。さて古義に

末中頃と云る意は末とはなかば通ひ住し盛の末のほどにて其末の間にひたすら絶しにはあらで中よどなりしを云なるべし

といへれど末ノ中ゴロといふ語あるべくもあらず。おそらくは弓に末ノナカといふ處あるによりてそれを中ゴロにいひかけたるならむ(卷十一一四一頁一アヅサ弓末ノハラ野參照)○不通有之を舊訓にユカザリシ考にタエタリシ古義にヨドメリシとよめり。卷二(一六九頁)に不通事ナクアリコセヌカモ、卷四(七四一頁)にタエヌ使ノ不通有者、下にも今コム吾ヲ不通トモフナなどあれば古義の訓に従ふべし

今更に何しかおもはむ(梓弓)ひきみ縦見よりにしものを

今更何牡鹿將念梓弓引見縦見縁西鬼乎

ヒキミユルシミはサマザマニ思見テとなり○卷四(六三二頁)に

今さらに何をかおもはむうちなびきこころは君によりにしものとあり

をとめらがうみ麻のたたり打麻かけらむ時なしにこひわたるかも
臧嬌等之續麻之多田有打麻懸續時無二戀度鴨

上三句は倦にかゝれる序なり。タタリは方なる臺に三本の柱を立てて絲をまとひかくるものにて今も然いふものなり。タタリの下にニを略したり○打麻は打チタル麻ならむ。然らば舊訓の如くウチソとよむべし。但古義に卷一なる打麻ヲ麻績ノオホキミの處に

打麻は麻をうむにはまづ打和らげて用るものなれば即ウチソと訓て字の如く打たる麻をいふにやともおもはるれども神祇令集解に宇都波多と見え又十六に打栲とあるなどは全織また全栲と聞えたれば打麻もなほ借字にて全麻なるべし。其は常は打和らげなど人の功をつけてうむことなるを、しかせずしてその

まゝうみつむぎせらるゝ好き麻と賞て稱る意なるべし
といひてウツソとよめり。なほ考ふべし○續は續の俗字なり

(たらちねの)母がかふ蠶トコの眉マユごもりいぶせくもあるかいもにあはずて
垂乳根之母我養蚕乃眉隱馬聲蜂音石花蜘蛛荒鹿異母二不相而

卷十一(二三二五頁)に

足常の母がかふこのまよごもりこまれる妹をみむよしもがも

とあり。上三句は序、イブセシは心の晴れぬ事

(玉だすき)かけねばくるしかけたればつぎて見まくのほしき君かも

玉手次不懸者辛苦懸垂者續手見卷之欲寸君可毛

考に

このカクは思懸るにはあらず。はやくあひし事をたすきを身にかけてまよふに譬
たり

といひ二註共に之に従ひたれど玉ダスキは此歌にてはカケネバの枕辭に過ぎず。

又下に手纏の縁語も無ければタスキにたとへたりとは見るべからず。案ずるにい
にしへつまどふ事をカクルともいひしにこそ。さればカクルは今關係スルといふ
にひとしかるべし○卷十一(二三六五頁)に

むかひては面かくさるるものからにつぎて見まくのほしききみかも

とあり

むらさきの綵イダガラ色イロ之ノかづらはなやか爾ニけふ見人に後こひむかも

紫綵色之繚花八香爾今日見人爾後將戀鴨

綵色之は古義に従ひてマダラノとよむべし(二一三二頁参照)初二は序なり○見人
を従來ミルヒトとよめり。さて古義にハナヤカニケフミル人ニを假ソメニアダア
ダシク相見シ人ナルヲと譯せり。見人はミシヒトとよむべし。否もしハナヤカ爾を
もとのまゝとせばミエシとよむべし

(玉かづら)かけぬ時なくこふれども何ナニ如シカ妹イモにあふ時もなき

玉纏不懸時無戀友何如妹爾相時毛名寸

このカケヌは思ハヌなり○何如を前註にナニヅモ、ナニシカ、イカニヅ、イカデカとよめり。イカデカの外はいづれにても可なれどしばらくナニシカとよむべし

あふよしのいでこむまではたたみごもかさねあむ敷いめにし見てむ
相因之出來左右者疊薦重編數夢西將見

三四は度々といふ事を文なしいへるなり。卷十一(二四九五頁)に

たたみごもへだてあむ敷かよはさば道のしば草おひざらましを
とあり

しらがつく木綿者花物ことこそはいつの眞枝も常不所忘

白香付木綿者花物事社者何時之眞枝毛常不所忘

卷三なる祭神歌(四六四頁)にオク山ノサカキノ枝ニシラガ付木綿トリツケテとあり。このシラガツクは木綿にかゝれる准枕辭なり。さて白紙附クルといふべきをシラガツクといへるはクシロツクタフシノ崎ニ、眞玉ツクヲチコチカネテなどと同例にて例の如く連體格のかはりに終止格をつかへるなり(一四七五頁以下参照)

○考に花物を花疑の誤としてハナカモとよめり。古義の如くハナモノとよみてアダダシキ物の意とすべし。集中にアダニをハナニといへる例多し。さてユフハハナモノは神ノ祭ニ用フル木綿ハ一時ノ物といふ意にや○眞板は眞淵に従ひて眞坂の誤とすべし。上にも眞坂ハ君ニヨリ西モノヲとあり。さてマサカは現在なり○コトコソハのコトを従來言の意としたれどさては一首の意義通せず。事と書けるは如の借字にてコトコソハはソノ如クニコソとなるべし○結句を従來ツネワスラエネとよめり。誤字あるにあらざるか。なほ考ふべし

いそのかみふるの高橋たかだかに妹がまつらむ夜ぞふけにける

石上振之高橋高高爾妹之將待夜曾深去家留

初二は序にてフルノタカハシは布留川に渡せる高橋なり。高橋は勾配ある橋をいへるにて特に高きを云へるにはあらじ○タカダカニは待つ状なり。はやく卷十一(二五一五頁)にタカダカニ我待ツ公ヲマチデナムカモとあり○ラムはラムヲとして心得べし

湊入の葦別小船さはりおほみ今こむ吾を不通ともふな

或本謄曰湊入爾蘆別小船さはりおほみ君にあはずて年ぞへにける

湊入之葦別小船障多今來吾乎不通跡念莫

或本謄曰湊入爾蘆別小船障多君爾不相而年曾經來

初二は序、今コムはオツツケ行カムとなり。別はワキとよむべし

或本謄の蘆別をも從來アシワケとよめり。さてアシワケヲブネとよみてはミナト

イリニのニの収まる所なきによりて字音辨證(上卷七頁)には爾をノとよめり。蘆別

をアシワケとよまば可なるにあらずや。○卷十一(二四七五頁)にも

湊入の葦わき小舟さはりおほみわがもふきみにあはぬころかも

とあり

水をおほみ上に種まきひえをおほみ擇擢之業曾吾獨宿

水乎多上爾種蒔比要乎多擇擢之業曾吾獨宿

卷十一(二三一一二頁)に

うつ田には稗はここばくありといへど擇爲我夜一人宿

とあり。○アゲは記傳卷二十九(一七七三頁)に「神代卷に高田萬葉に上ニ種マキなど

あるは水田の高きを云るなり」といへる如し(同書卷十七〇頁九參照)○上三句は序な

り。初句と第三句と同格なるが初句は第二句を云はむとていへるのみ。○擇擢之を

從來エラエシとよみたれどエラシシとよむべし。否擇と擢と一字は衍字ならむ。お

そらくは擇の傍に一本によりて擢と書きたりしを誤りて下にもて來たるならむ。

さて擢之に従はばヌカシシとよむべし。○考に業を吾等の誤、吾を夜の誤とせり。之

に基づきて四五はエラシシワレゾヨヲヒトリヌルとよむべし。君ガエラビ棄テ給

ヒシ我ゾ云々といへるなり

靈合者相寢物乎小山田のしし田もるごと母しもらすも

一云母之もらしし

靈合者相宿物乎小山田之鹿猪田禁如母之守爲裳

一云母之守之師

初二を古義にはタマシアヘバアヒネシモノヲとよめり。宜しく略解に従ひてタマアハバアヒネムモノヲとよむべし。魂ダニ相逢ハバ遂ニ相寢ムモノヲといへるなり。卷十四にも母ハモレドモタマゾアヒニケルとあり。卷三五〇五頁なるオホキミノムツタマアヘヤは別なり。〇シシ田は猪鹿の荒す田なり。

春日野にてれるゆふ日の外耳君をあひ見て今ぞくやしき

春日野爾照有暮日之外耳君乎相見而今曾悔寸

初二は序なり。ヨソはヨソ目なり。マトモナラズなり。此序めづらし

(あしひきの)山よりいづる月まつと人にはいひて妹まつ吾を

足日本乃従山出流月待登人爾波言而妹待吾乎

吾ヲは吾ヅなり。古義にモノヲの意なりといへるは非なり。〇此歌卷十三なる長歌の末にさながら入りてそこには君待吾乎とあれば眞淵は此歌の妹待を君待に改めて

女の通ふ事は先はなし。且歌も女のよめるさま也

といひ雅澄は

男の女の門近く至りて出来むほどを待よしなればさてあるべきにこそといへり。案ずるにこは屋外にての出合とおぼゆれば男の女を待つ事もあるべく又女の男を待つ事もあるべし。されば眞淵の如く字を改めむ事は勿論雅澄の如く助け釋かむ事も不用なり。〇第四句の語例は卷十一(二四三九頁)に笠なみと人にはいひてあまつつみとまりし君がすがたしおもほゆとあり

ゆふづくよあかとき闇のおほほしく見し人故にこひわたるかも

夕月夜五更闇之不明見之人故戀渡鴨

初二は序なり。卷十一(二四二八頁)にもユフヅクヨアカトキヤミノアサカゲニ云々

とあり。新月の頃は曉は闇ければユフヅクヨアカトキヤミといへるなり

(ひさかたの)天水虚に照日のうせなむ日こそ吾戀やまめ

久堅之天水虚爾照日之將失日社吾戀止目

天水廬はアマツミソラともアマノミソラともよむべし(二二〇五頁参照)○照日は類聚古集などに照月とあるに従ひてテルツキノとよむべし。前後みな寄月の歌なればなり

十五日△いでにし月のたかだかに君を座イセ而シテなにをかおもはむ

十五日出之月乃高高爾君乎座而何物乎加將念

初二は序なり。初句をモチノヒニとよみしを雅澄は日の下に夜の字を補ひてモチノヨニとよめり。之に従ふべし。○タカダカニの語例は集中にタカダカニワガマツキミヲ(卷十一)妹ガマツラム(卷十一)キミマツ夜ヲハ(同)コムトマケム(卷十三)マツラムキミヤ(卷十五)マツラムココロ(卷十八)とありて待といふ語と照應せざるは今の歌と卷四(八〇四頁)なる

しら雲のたなびく山のたかだかに吾念妹をみむよしもがもとのみなり。上(二六三一頁)にもいへる如くタカダカニは待つ貌とおぼゆれば今はイマセテを待座セテ、卷四なるワガモフはワガ待念フと待といふ語を添へて心得べし。卷四なるは吾待妹今は待出而の誤字かとも思へど然にはあらず。さてイマセ

テは御出ヲ願ウテとなり

月夜よみ門にいでたち足ツラ占してゆく時さへや妹にあはざらむ

月夜好門爾出立足爲而往時禁八妹二不相有

足占の事は卷四(七九三頁)なる

つくよには門にいでたちゆふけとひあうらをぞせしゆかまくをほりの處にいへる如く足數によりて吉凶を占ふ業なり。第三句は足占シテ吉ト見定メテと辭を加へて心得べし

(ぬばたまの)夜わたる月のさやけくばよく見てましを君がすがたを

野子玉夜渡月之清者吉見而申尾君之光儀乎

(足引の)山をこだかみゆふ月をいつかと君をまつがくるしさ

足引之山呼木高三暮月乎何時君乎待之苦沙

上三句は前註にいへる如くユフ月ヲイツカト待ツガ如ク君ヲイツカト待ツガク
ルシサといふことをつづめたる一種の序なり。○こゝのユフ月は新月にはあらで

ただ夕べの月をいへるなり○第二句は古義に山ノ梢ノ木高キ故ニと譯せる如し。
コダカミは字の如く木高ミなり

つるばみの衣ときあらひまつち山古人モトツトにはなほしかずけり

椽之衣解洗又打山古人爾者猶不如家利

上三句は序なり。其中にて又ツルバミノキヌトキアラヒはマツチ山の序なり。又打をつづむればマツチとなるが故にキヌトキアラヒ又打といひかけたるなり。卷六なる長歌(一一三〇頁)にもフルゴロモマツチノ山ユとあり○さて序のかゝりを契沖は山の麓をモトともいへばマツチ山モトツト人とかゝれるなりといひ、略解古義には

マツチ山モトツと音の通へばマツチ山はモトツといはむ料なり

といへり。奇僻なるやうなれどしばらく二註の説に従ふべし○卷九(一八三三頁)なるツママツノ木ハ古人ミケムは文字はことおなじかれどフルヒトとよみて昔の人の意とすべき事彼歌の處にいへる如し。又卷十(一九九八頁)にはモトツ人を本人と書けり。上(二六〇六頁)なるシロタヘノ袖ノナレニシ君ヲシヅモフのナレニシ

君も相似たる意なり○シカズケリは若カザリケリを省きなどしたるにあらず。いにしへはかくの如くただ二語を並べしが語法やうやく精しくなりて所謂連用格が生せしなり。アリナリがアルナリとなり、タテリ見ユがタテル見ユとなれるも然り。此等の例を集めなば太古の語法も窺ひつべし。漢文にも古はただ語を並べし例あり。たとへば詩經なる齊風の鷄鳴に無庶予子憎とあるは庶モトツトニ予ニヨリテ子キミヲ憎マシムル無カレと心得べきなり

佐保河の河浪たたずしづけくも君にたぐひてあすさへもがも

佐保河之河浪不立靜雲君二副而明日兼欲得

初二は序なり。四五は君ト一緒ニ明日モ居リタシとなり

(吾妹兒にころも)かすがのよしき河よしもあらぬか妹が目をみむ

吾妹兒爾衣借香之宜寸河因毛有額妹之目乎將見

上三句は序、其中にてワギモコニコロモの八言はカスガにかかれる枕辭なり。ワギモコはかく序中の語なれば主文の妹と重複するを嫌はざるなり○ヨシキ川は即

ミヤ川にて春日山より出づる一谿流なり○ヨシモアラヌカはスベモアレカシな
り

(とのぐもり雨)ふる河のさざれ浪まなくも君はおもほゆるかも

登能雲入雨零河之左射禮浪間無毛君者所念鴨

上三句は序、トノグモリ雨の七言は布留河にかゝれる枕辭なり○トノグモリははやく卷三(四五八頁)にもトノグモル夜之と見えたり。タナグモリともいひてただ曇る事なり(二六五五頁参照)○考及略解の釋の誤れるは古義に辨じたる如し

吾妹兒やあをわすらすないそのかみ袖ふる河のたえむともへや

吾妹兒哉安乎忘爲莫石上袖振河之將絕跡念倍也

初二は古義にいへる如く吾妹子ヨ我ヲ忘レタマフナとなり。三四は序なり。タエムトモへやは我ハ絶エムト思ハメヤ思ハジとなり○袖フル河ノの袖は卷九(一八三三頁)なるツママツノ木ハのツマ、卷十二(二一三九頁)なるキミマツ原ハのキミとおなじく句中の枕辭なり。二註に「布留山をヲトメ子ガ袖フル山といへる如し」といへる

は例とすべからざるものを例とせるなり

神山の山下とよみゆく水の水尾たえずば後も吾妻

神山之山下響逝水之水尾不絶者後毛吾妻

水尾を略解にミヲシとよめるはわろし。古義の如くかならずミヲノとよむべし。ミヲノ以上は序なり。而して序なるが故にミヲシとはよむべからざるなり

神のごときこゆる瀧の白浪の面知君がみえぬこのごろ

如神所聞瀧之白浪乃面知君之不所見比日

上三句は序、神は雷なり○面知の語例は下に

みづぐきの崗のくす葉をふきかへし面知兒等がみえぬころかも
とあり。否その歌は此歌を學びたるものとおぼゆ。卷二(二一四頁)なるもゆる火もとりてつつみてふくろにはいるといはずや面智男雲

も面知因男雲の誤字とすべし。さて面知を契沖以下舊訓の如くオモシルとよみて

眞淵は

上よりはオモシロシといひ、受る句は面ヲ見知タル君てふ意にて面知とは常に
見なる、人にもあらず、よそながら其面を相見知て目をくはせ心を通はするを
いふべし

といひ、宣長は

面知はただ面を知といふのみにあらず、シルはいちじろき意にて他の人にはま
がはずいちじろく見ゆる君といふ事也。故に瀧ノ白浪或は此末に岡ノクズ葉ヲ
フキカヘシなどいへる、皆いちじろき物を序とせり

といへり。又守部鐘のひびき八十八丁はアヒミシとよみて

面知とは逢見と云義訓の假字也。諸抄皆オモシルと訓たるはわろし。十一に對面
者と書たるをムカヘレバと訓たれど是もアヒミレバと云義也

といへり。卷十一なる對面者は對面者の誤としてムカヒテハとよむべき事彼卷(二
三六五頁)にいへる如し。さて面知はしばらくアヒミシとよむべし。卷二なる面知因
男雲はアフヨシナクモとよむべければなり

山河の瀧にまされる戀すとぞ人知りにける無間念者

山河之瀧爾益流戀爲登曾人知爾來無間念者

瀧ニマサレルとは瀧ニマサリテ心ノタギツとなり。結句を古義にマナクシモヘバ
とよみたれど此歌はテニヲハに當る字を皆書顯したるにシとよむべき字なけれ
ば舊訓の如くマナクオモヘバとよむべし

(あしひきの)山水の音にいでず人の子姤ユエニこひわたるかも

足檜木之山水之音不出人之子姤戀渡青頭鷄

初二はオトまでにかゝれり。上(二六一九頁)なるムラサキノワガ下紐ノ色ニイデズ
と同格なり。オトニイデズはヒツカニなり。人ノ子ユエニは人ノイツク娘ナルモノ
ヲとなり。○カモを青頭雞と書けるに就いて契沖は

青頭雞は鴨なり。もろこしの文にもあること歟(初稿本)

といひ又

青頭雞は鴨の義訓なり(精撰本)

といひ雅澄は

青頭雞は鴨にて哉カモの借字なり。鴨をかく書は霰を丸雪と書る類なり。漢名カモにあ

ず。戀水カミダ西渡カミダなどかけるに似たることなり。此類集中に甚多し

といへり。案ずるに青頭雞は三國魏時代に漢土に行はれし鴨の俗稱なり。宋六朝の

裴松之の三國志注に

姜維寇隴右時安東將軍司馬文王鎮許昌。徵還擊維。至京師。帝於平樂觀以臨軍。過中領軍許允與左右小臣謀。因文王辭殺之。勒其衆以退。大將軍已書詔於前。文王入。帝方食栗。優人雲午等唱曰。青頭雞青頭雞。青頭雞者鴨也。帝懼不敢發。

とあり。煩はしけれど右の文を補譯せむに

三國の時蜀の姜維が魏の隴西を侵した。其時の魏主は廢帝芳であつたが安東將軍司馬昭が許昌に居たのを呼戻して維を討たしめた。其途中京師を過ぎた。是より先、大將軍司馬師、安東將軍司馬昭兄弟は故丞相司馬懿の子として權を專にして居たから中領軍許允等、其終に魏の社稷を奪はんを恐れ昭が京師を過ぎて魏主に暇乞をするを機會として之を殺し其軍を率ゐて昭の兄司馬師をも退げんことを謀り司馬昭を殺すべき旨の詔書を草したが魏主がまだ詔書に華押を署せざる間には、や昭が入來つた。然るに押字を署せざれば詔書の効力が發生せぬ

からはやく押字をと云ひたいが目の前に昭が居るのであるから押とは云はれぬ。そこで押と同音共にアフなる鴨の俗稱を青頭雞といふから宮廷俳優なる雲午等が氣をきかせて青頭雞々々々と呼んだが魏主は懼れて押字を書かなかつた。其内に昭は出て行いてしまつた。さうして魏主芳は後に司馬師に廢せられ其次の後廢帝髦は司馬昭に殺され其次の元帝奐の時に昭の子司馬炎に迫られて位を禪り魏が亡び晋が興つた。青頭雞一件の時、兄師が撫軍大將軍兼尙書で弟昭は安東將軍で兄師の下に附いて居たのであるが兄が死んだ後に、明帝の時に進んで晋王となり死して文と謚せられた。其後の稱なる文王を三國志注には前へ廻らして安東將軍司馬文王と書ける爲に事情を知らぬ讀者は所謂大將軍より先輩であるやうに誤解するであらうと思ふから少々補譯の筆を進めたのである。

右の如くなれば青頭雞は漢名にて萬葉集の編者が妄に戲書したるにはあらず。續日本紀神護景雲三年冬十月の下に

太宰府言ス。此府ハ人物殷繁ニシテ天下ノ一都會ナリ。子弟ノ徒學モクナレスル者稍衆シ。

而ルニ府庫タダ五經ヲ蓄ヘテ未三史ノ正本アラズ。涉獵ノ人其道廣カラズ。伏シテ乞フ、列代ノ諸史各一本ヲ給ハリ管内ニ傳ヘ習ハシ以テ學業ヲ興サムト。詔シテ史記、漢書、後漢書、三國志、晉書各一部ヲ賜フ

とある三國志は陳壽の原撰にや斐松之の補撰にや知られねど今の歌にカモを青頭雞と書けるを見れば補撰又は魏氏春秋も亦夙く我邦に渡來したりしなり

高湍△なる能登瀨の河の後將合妹には吾は今ならずとも

高湍爾有能登瀨乃河之後將合妹者吾者今爾不有十方

卷十一(二二八四頁)に

鴨川の後瀨しづけく後もあはむ妹には我は今ならずとも

とあり○初句を考に卷三(四一三頁)に

さざれなみ磯こせぢなるのとせ川おとのさやけさたぎつ瀨ごと

とあるに據りてコセナルと四言によめり。高湍の下に道を補ひてコセヂナルとよむべし。コセは大和高市郡なる巨勢にてノトセ川は今の重坂川なり○初二は序なり。第三句は考の如くノチモアハムとよむべし(古義にはノチニとよめり)序のかゝ

りは契沖の説に

登と知と通すればノトセを承て後モアハムと云へるなり

といへり。此説の如し

(あらひぎぬ)取替河の河よどの不通牟心おもひかねつも

浣不取替河之河余杼能不通牟心思兼都母

初句は枕辭、上三句は序なり○取替河を舊訓にトリカヘガハとよめるを契沖は

和名集を考るに添下郡鳥貝和語は文字に定なし。取替はトリカヒともよむべければ、もし此鳥貝にある川にや

といひ眞淵以下此説に従ひたり。替はカへとよむべくカヒには借るべからざるに似たれど卷二にハガヒノ山を羽易乃山と書き卷十三にウマカハバを馬替者と書けるを思へば取替河はげにトリカヒ河とよむべし。但和名抄の鳥貝は鳥見の誤とおぼゆれば之に擬すべからず。恐らくは攝津國の鳥飼ならむ○心ヲオモフは今いふ心ヲ持ツなり。古義に四五を釋せるやうわろし。足ヲ遠クシヨウトハ得思ハヌといへるなり○不は諸本に衣とあり

いかるがのよるかの池の宜毛君乎いはねばおもひぞわがする
班鳩之因可乃池之宜毛君乎不言者念衣吾爲流

初二は序なり。ヨルカを以てヨロシをさそひ出でたるはノトセを以てノチを呼起したるに似たり。○第三句を従来ヨロシクモとよめり。さて略解にはイハネバをイハヌニの意として

人は我故に君をよくもいはぬに我はとにかくに君をおもふといふ也
といひ古義には乎を之の誤として

わがとかく君をおもひまつはせども君が我をうけひき相かなふけしきの見え
ずいつも苦々しくのみいへば物思をぞ我はするとなり

といへり。案するに乎を之の誤とし宜毛をヨロシトモとよむべし。釋はほほ古義に
いへる如し。○班は斑の誤なり

(こもりぬの)したゆ者こひむいちじろく人のしるべくなげきせめやも

絶沼之下従者將戀市白久人之可知歎爲米也母

卷十一(二二九一頁)に

こもりぬの下ゆこふればすべをなみ妹が名のりつゆゆしきものを

又(二三九三頁)

おもひでてねにはなくともいちじろく人のしるべくなげかすなゆめ

とあり。○シタユは下ニなり。者は曾の誤字ならむ。シタは水草の下を心シタにかけたるなり。略解に「シタユは下樋より水の通ふに譬へて人にしられじといふ意也」といへるはいみじき誤なり。○絶は隱の誤字かと眞淵いへり

ゆくへなみこもれる小沼のしたもひに吾ぞ物もふ頃日之間

去方無三隱有小沼乃下思爾吾曾物念頃者之間

初二はシタにかゝれる序にてユクヘナミはハケロガナサニとなり。略解に「下樋の水の通ひてたまれる沼也」といへるは妄なり。はけ口無きが故にコモレルといへるなり。○シタモヒは心のうちに思ふ事なり。結句を略解にコノゴロノマハ古義にコノゴロノアヒダとよめり。宜しくコノゴロノマヲとよむべし。上二六二三頁にもコノゴロノ間ノ戀ノシゲキニとあり

く
（こもり沼ヌの）したゆこひあまり（しら浪の）いちじろくいでぬ人のしるべ

隱沼乃下從戀餘白浪之灼然出人之可知

コモリ沼ノはシタにかゝりシラナミノはイチジロクにかゝれる枕辭にて兩者の
間には關係なし。略解に

堤に隠れたる水の溢れて堤を越出るを以て思にあまりて色にいでなば人にし
られんといふを譬ふ

といへるは妄なり

（妹が目をみまハく）ほり江の小浪ハシレナミしきてこひつつありとつげこそ

妹目乎見卷欲江之小浪敷而戀乍有跡告乞

妹ガ目ヲミマクはホリ江の枕辭、上三句はシキテの序なり。シキテは類ニなり。コヒ
ツツアリとつづけて心得べし。○小浪は上二六四○夏に雨フル河ノ左射禮浪とあ
り。卷十七なる長歌にも佐射禮奈美タチテモキテモとあればサザレナミとよむべ

し。但新撰字鏡に佐々良奈彌とあればサザラナミとよまむもあしからず

いはばしるたるみの水のはしきやし君にこふらくわがこころから

石走垂水之水能早敷八師君爾戀良久吾情柄

初二はハシキにかゝれる序、ハシキヤシは君にかゝれる准枕辭なり。○こゝのタル
ミは瀧なり。二註に地名とせるは非なり。又初二のかゝりを水ノハシルとかゝれる
なりといへるも非なり。ハシルはハシキにいひかくべからず。又イハハシルタルミ
ノ水ノハシルとはいふべからざるが故なり。契沖がハの一言にかゝれるなりとし
て「ハの一もじをハヤと云意に云へり」といへるも從はれず。案ずるにいにしへ速な
る事をハシ、ハシキともいひしかば水ノ早シキをハシキヤシ（可愛）にいひかけたる
ならむ。今敏捷なる事をハシコイといふはこのハシキの轉せるなるべく鷹の一種
なるハシダカも殊に敏捷なるが故にさる名を負へるなるべし。○四五は卷四七七
○夏にツミテコフラクワガ心カラとあるに似たり

君は來キず吾は故無ナたつ浪シの敷シわびしかくて來キじとや

君者不來吾者故無立浪之數和備思如此而不來跡也

數は考に従ひてシクシクとよむべし古義にはシバシバとよめり。タツ浪ノはシクシクにかゝれる枕辭なり。カクテ來ジトヤは終ニ來ジトヤとなり○故無を從來ユエナミとよみて我ハ女ナレバ我ヨリ行クベキ理由無キニヨリテといふ意とせり。案するに玉篇に故事也とあり。又易經繫辭なる知幽明之故左傳なる謀鄭故也問晉故以鄭故などもコトとよみ來れり。孝徳天皇紀にもコトヨサシキを故寄と書けり。されば故無はコトナミとよみて手持不沙汰デアルニヨリテといふ意とすべし○コトナミタツナミノはわざと韻を合せたるにて卷七なる浪高しいかにかちとりみづとりのうきねやすべきなほやくぐべきと同例なり

あふみの海へたは人しるおきつ浪君をおきてはしる人もなし

淡海之海邊多波人知奥浪君乎置者知人毛無

女の歌なり。へたは岸近き處なり。シル人は我知レル男となり○此歌は極めてめづらしき格なれば從來解得たる人なし。其中にて最深く到れるは宣長の説なり。其説

にいへらく

此歌上の句は君ヲオキテハを隔て、シル人モナシといふへかゝる序なり。其序の意はへたノ浪ハ人皆シレドモ沖ノ浪ハ遠キ故ニシル人モナシといふ也。是は只序のつづけの意のみにてさて歌の意は下句にあり。君ヲ除テ外ニシル人ハナシといふのみ也。知人とは逢見る人なり

といへり。打見にはオキツ浪はオキテハにかゝれる枕辭と見ゆれど之を枕辭とすればアフミノ海へたハ人シルの二句が無用となるめれば棄てがたき初一念を棄ててへたハ人シルとオキツ浪シル人モナシとをむかはせたれど、さては又君ヲオキテハの一句浮漂ふが故に上三句を序とし又オキツ浪に對してへたをへたノ浪と譯せるなり。案するに此歌はまづ初二を除きて見べし。オキツ浪はオキテハにかれる枕辭なり。さてオキツ浪君ヲオキテハシル人モナシと作りし後其三句に對する文としてアフミノ海へたハ人シルの二句を作り添へしなり。何故に然いひしかといふに大湖は岸邊の風景こそ人普く知りたれ沖中の風景は知れる人少きが故なり。卷十一の卷頭なるかの

新室の壁草かりにいましたまはね、草のごとしなふをとめは君がまにまに
新室をふみしづむ子が手玉ならずも、玉のごとてりたる君を内へとまをせ
の各下半は副物に過ぎざる事彼處にいへる如し。今の歌にては初二が副物なり。毛
詩なるかの

鼠ヲ相ルニ皮アリ、人ニシテ儀ナシ、人ニシテ儀ナクバ、死セズシテ何ヲカ爲ム
などとも相似たる所あり。もし詩の六義に擬せば一種の興と謂ふべし

(大海の底を)ふかめてむすびてし妹が心はうたがひもなし

大海之底乎深目而結義之妹心者疑毛無

卷四(六五八頁)に

赤駒のこさぬうませのしめゆひし妹が心はうたがひもなし

とあり○大ウミノ底ヲの八言は枕辭なり。フカメテは心ヲ深メテすなはち心フカ
クといふことなり。はやく卷四(七六一頁)に

わたの底おきをふかめてわがもへる君にはあはむ年はへぬとも

とあり(二四九八頁参照)○ムスビテシは相結ビテシなり。妹が心をむすぶにあらす

さだの浦によするしら浪あひだなくおもふを如何妹にあひがたき

貞能納爾依流白浪無間思乎如何妹爾難相

初二は序なり。サダノ浦ははやく卷十一(二四六七頁)にサダノ浦ノコノサダスギテ
後コヒムカモとあり○如何を舊訓にナニゾ、略解にナゾモ、古義にイカデとよめり。
イカデとはよみがたし。しばらくナドカとよむべし○納は納の誤なり

おもひいでてすべなき時は(天雲の)おくかもしらずこひつつぞをる

念出而爲便無時者天雲之奥香裳不知戀乍曾居

オクカモ知ラズを略解に「ユクヘモシラズにおなじ」といひ古義に「ソコヒモ知ラズ
ニといはむが如し」といへり。卷十三に立良久ノタヅキモシラズ居久ノオクカモシ
ラニ、又卷十七に大海ノオクカモシラズユク我ヲとあり。宜しくアテモ知ラズと譯
すべし

(天雲の)たゆたひやすき心あらば吾乎莫憑までばくるしも

天雲乃絶多比安心有者吾乎莫憑待者苦毛

第四句を略解にアヲナタノメツ古義にアレヲナタノメとよめり。ワレヲナタノメは我ヲシテ憑マシムナにて所詮來ラムト契ルナとなり

君があたり見つつもをらむいこま山雲なたなびき雨はふるとも

君之當見乍母將居伊駒山雲莫蒙雨者雖零

伊駒山は奈良より西に當りて大和河内に跨れり

中々に如何しりけむ吾山にもゆるけぶりのよそにみましを

中中二如何知兼吾山爾燒流火氣能外見申尾

三四は序なり。吾山は記傳卷三十七(二二一二頁)に

十卷に靈寸春吾山之於爾十二卷に吾山爾燒流火氣能などあるは共に春山を吾山と誤れるなり。春と吾とは草書いとよく似たればなり

といへり。前者は愛寸吉吾家之於爾の誤なるべき事卷十一(一九六五頁)にいへる如し。こゝの吾山はげに春山の誤ならむ。○如何を舊訓にナニニとよみ略解古義にイカデとよめり。しばらくナドカとよむべし

吾妹兒に戀爲便名鴈^{ムネ}胸^フ乎熱^{ヤキ}あさ戸あくればみゆる霧かも

吾妹兒爾戀爲便名鴈^{ムネ}曾乎熱^{ヤキ}且戸開者所見霧可聞

卷十一(二二七頁)に

わぎもこに戀無乏いめにみむと吾はおもへどいねらえなくに

とある第二句を二註にコヒスベナカリとよみたれどこはコヒテスベナミとよむべし。又卷十七に大伴池主の歌に

わがせこに古非須弊奈賀利あしがきのほかになげかふあれしかなしも

とあり。これに據りて今も前註の如くコヒスベナカリとよむべきかといふにコヒテといふべきを略せる、スベナミといふべきをスベナカリといへるいといふか。し。おそらくはこは戀爲便名編などの誤にてコヒテスベナミとよむべく池主の歌は名鴈と誤り書けるを其ままに例としてコヒスベナカリとよめるならむ。なほ卷十七に至りて云ふべし。○胸乎熱は舊訓にムネヲヤキとよめるを二註にムネヲアツミとよみ改めたり。結句の霧は心火の烟と見なしたるなればそれに對してもムネヲヤキとよまざるべからず

あかときの朝霧隱反羽二如何戀の色にいでにける

曉之朝霧隱反羽二如何戀乃色丹出爾家留

隱を考にカクリとよみ古義には卷十五にアカトキノアサギリ其問理とあるに依りてコモリとよめり。なほ考に従ふべし。○霧を朝ぎり、夕ぎり、夜ぎりに分たば曉の霧は朝霧に屬すべければかくもいふべし。○羽を考に詞の誤とし古義に爲の誤とせり。後者に従ふべし。但古義に「詞の字をシの假字に用たる例なし」といへるは非なり。卷十五なる長歌に宇伎禰乎詞都追とあればなり。○如何を從來イカデカとよめり。しばらくナドカモとよむべし。○戀を人に擬して我ハ人目ヲシノビテ朝霧ニカクレテ歸リシヲソノ心ヅカヒヲモ思ハデナド戀ノ色ニ出デテ人ニ知ラレシゾといへるなり。

おもひいづる時はすべなみ佐保山にたつ雨霧のけぬべくおもほゆ

思出時者爲便無佐保山爾立雨霧乃應消所念

三四は序なり。アマギリめづらし

きりめ山往反道の朝がすみほのかにだにや妹にあはざらむ

殺目山往反道之朝霞髣髴谷八妹爾不相牟

上三句は序なり。キリメ山は紀伊にあり。往反を從來ユキカフとよめり。さて二註に「此山の邊の妹許行て逢はずしていたづらに歸るとてよめるなるべし」といへり。案ずるにもしざる意ならばユキカフとはよまでユキカヘルとよむべし。語例は卷十九なる餞入唐使歌に

天雲のゆきかへりなむものゆるにおもひぞわがする別かなしみ

とありてユキは軽く添へたるなり。サキチルのサキにおなじ。○四五はホノカニナリトモ妹ニ逢ハザラムカ、嗚呼逢ハマホシとなり

かくこひむものとしりせば夕おきてあしたは消流露ならましを

如此將戀物等知者夕置而且者消流露有申尾

夕を略解にヨヒニとよめり。舊訓に従ひてユフベとよむべし。消流を二註にケヌルとよめり。宜しくキユルとよむべし。第三句以下は露ノ如ク命短カラマシヲといへ

るなり

暮トヨおきてあしたは消流ユルしら露のけぬべき戀も吾はするかも
暮置而且者消流白露之可消戀毛吾者爲鴨

後つひに妹にあはむとあさ露のいのちは生けり戀はしげけど
後遂爾妹將相跡且露之命者生有戀者雖繁

アサ露ノ如キ命となり。シゲケドはシゲケカレドなり

あさなさな草の上しろくおく露のけなば共にといひし君はも

朝且草上白置露乃消者共跡云師君者毛

上三句は序なり。ケナバ共ニトは死ナバ諸共ニ死ナムとなり。ハモは消息の知られぬにいふテニヲハなり

朝日さすかすがの小野におく露のけぬべき吾身をしけくもなし

朝日指春日能小野爾置露乃可消吾身惜雲無

上三句は序ヲシケケモはヲシカル事モとなり

(露霜の)けやすき我身おいぬとも又若反シテ君をし待たむ

露霜乃消安我身雖老又若反君乎思將待

卷十一二四四一頁にも

朝露のけやすき吾身おいぬとも又をちかへり君をし待たむ

とあり。古義に若反の上に變の字を補ひたれどもとのまゝにてもヲチカハリとよみつべし。○第二句の次にナレバといふことを補ひて聞くべし。考に『此歌一二句の言と三句より下と言の道たがへり』といへるは誤解なり。初二はオイヌトモにかゝれるなり。ヲチカハリにかゝれるにあらず

君まつと庭耳ミミをればうちなびくわが黒髪に霜ぞおきにける

或本歌尾句云しろたへのわが衣手に露ぞおきにける

待君常庭耳居者打靡吾黒髪爾霜曾置爾家類

或本歌尾句云白細之吾衣手爾露曾置爾家留

庭耳を舊訓にニハニシとよめるに基づきて古義に耳を西の誤とせり。之に従ふべ

し。略解にニハノミとよみてニハニノミのニを省きたるなりといへるは非なり○
卷二(一三五頁)に

ゐあかして君をばまたむぬばたまのわがくる髪に霜はふるとも

又卷十一(二四四一頁)に

まぢかねて内へは入らじしろたへのわがころもでに露はおきぬとも

とあり

(朝霜の)けぬべくのみや時なしにおもひわたらむいきのをにして

朝霜乃可消耳也時無二思將度氣之緒爾爲而

トキナシニは始終なり。イキノヲニシテはただイキノヲニといはむにひとし。はや
く卷四(七六三頁)にもカクバカリイキノヲニシテワゴヒメヤモとあり○二三四
は始終死ヌ程ニ思ヒ續ケル事カとなり

左佐浪之波越安暫仁ふる小雨あひだもおきてわがもはななくに

左佐浪之波越安暫仁落小雨間文置而吾不念國

上三句は序なり。卷十一(二四六五頁)にも

すが島の夏身の浦による浪のあひだもおきてわがもはななくに

とあり○第二句を略解古義共にナミコスアゼニとよみたれど、まづサザ浪ノ波と
はいふべからず。次に雨絲の繁きを示さむとには田又は溝にふる小雨をこそいふ
べけれ、畔にふる雨をしもいふべきにあらず。次に小波は古書にサザレナミ又はサ
ザラナミと見えてサザナミといへる事なし。享和本新撰字鏡に泊泊、佐々奈彌とあ
れどこは天治本によれば佐々良奈彌の良を脱せるなり。次に暫にセの音なし。より
て案ずるにこゝのササナミもなほ地名にて第二句はもとナミクラガネニなどあ
りしを誤れるならむ。越は衍字、安は鞍、暫は蟹の誤にや。卷七(一二八二頁)に佐左浪乃
連庫山ニ雲キレバとあり。右の如くならば此歌并に享和本字鏡を證として小波は
いにしへよりサザナミともいひきといへる説は消滅すべし

神さびていはほにおふる松が根の君心は忘かねつも

神左備而巖爾生松根之君心者忘不得毛

カムサビテは物フリテなり。上三句は序なり。君心は長心の誤にて忘は念の誤なら

む。ナガキココロハオモヒカネツモとはユルリトシタ心ハ持タレズとなり。卷七に
も

にはつ鳥かけのたり尾のみだれ尾の長き心もおもほえぬかも

とあり

みかり爲雁羽の小野のなら柴のなれはまさらずこひこそまさされ
御獵爲鴈羽之小野之櫟柴之奈禮波不益戀社益

上三句は序なり。爲を從來スルとよめり。宜しくセスとよむべし。○鴈羽、小野は地名
とは思はるれどいづれの書にも見えねば鴈路小野の誤ならむと古義にいへり。げ
に然るべし。カリデノ小野はやく卷三(三四八頁)に見えたり。○四五はカク年月ヲ
經レドモ飽キハマサラズシテ却リテ戀ヒマサルといへるなり

櫻麻ツラフのをふのした草、早生者、妹が下紐トウ不解ダ有申尾マシヲ

櫻麻之麻原乃下草早生者妹之下紐不解有申尾

櫻麻はサクヲとよむべし(二四四〇頁参照)○第三句には誤字あるべし。結句は略

解の如くトカザラマシヲとよむべし。妹が下紐ヲ解カザラムといふ意なり

春日野に淺茅しめゆひたえめやとわがもふ人はいや遠長に

春日野爾淺茅標結斷米也登吾念人者彌遠長爾

初二は淺茅ニ標繩ヲ結ヒテソノ標繩ノ斷エザル如クといふ意にいひかけたる序
なり。淺茅ニのニを略せるは古歌の常なり。○タエメヤトは絶エムヤハ絶エジトと
なり。結句はイヤ遠長ニ幸カレカシといふべきを略せるなり

(あしひきの)山すがの根のねもころにわれはぞこふる君がすがた乎

或本歌曰わがもふ人を見むよしもがも

足檜之山菅根乃勲吾波曾戀流君之光儀乎

或本歌曰吾念人乎將見因毛我母

初二は序なり。乎は爾の誤ならむ。現に爾とある本あり

(かきつばた)さき澤におふるすがの根のたゆとや君がみえぬこのごろ
垣津旗開澤生菅根之絶跡也君之不所見頃者

上三句は序、サキ澤は佐紀澤なり。初句は枕辭のみ。はやく卷四(七五九頁)にヲミナベシサキ澤ニオフル花ガツミ又卷十(一九六〇頁)にヲミナベシサキ野ニオフルシラツツジとあり。〇タユトヤは絶エムトヤなり。

(あしひきの)山すがの根のねもころにやまずおもはば妹にあはむかも
足檜木之山菅根之懃不止念者於妹將相可聞

初二は序

あひ念はずあるものをかも(すがの根の)ねもころごろにわが念へるら
む

相不念有物乎鴨菅根乃懃懇吾念有良武

初句は相手ハ相念ハズなり。アルモノヲカモはアルモノヲ如何ナレバカとなり

(山すげの)やまず而きみをおもへかもわがころどのこのごろはなき
山菅之不止而公乎念可母吾心神之頃者名寸

而は母などの誤ならむ。ココロドはタマシヒなり

妹が門ゆきすぎかねて草むすぶ風ふきとくな又かへりみむ

一云ただにあふまでに

妹門去過不得而草結風吹解勿又將願

一云直相麻氏爾

第三句のムスブといふ辭おちつかず。後世ならばムスビツなどいふべきなり。草を結ぶはその解けざる間は結びし人の身に事なしといふ俗信に基づきてもものするなり(二三一三頁参照)〇又カヘリミムは立歸リテ又見ムとなり。〇卷十一に

妹が門ゆきすぎかねつ久方の雨もふらぬかそをよしにせむ

とあり。今は之とは異にて妹が門ヲスドホリシカネテといへるにあらず。遠國へ行きなどすとて妹が門を立去りかねたる趣なり

浅茅原茅生に足ふみころぐみわがもふ兒等が家のあたり見つ

一云妹が家のあたり見つ

浅茅原茅生丹足踏意具美吾念兒等之家當見津

一云妹之家當見津

茅生はやがてアサチ原なり。重ね云へるは辭の文のみ。百千ドリ千ドリハクレドな
どの類なり。〇いにしへ足フムといふ語ありて足ニテ何々ヲ踏ムといふ意を何々
ニ足フムといひしなり。卷十一にツルギダチ諸乃ノ利キニ足フミテ又卷十四にカ
リバネニ足フマシ牟奈クツハケワガセとあり。日本紀にも
なつぐさのあひねのはまのかきがひにあしふますな、あかしてとほれ
とあり。〇コログミはジレツタサニなり。一五〇七頁及一七八二頁参照。初二は直
に此句にかゝれり。妹がり行かむとして淺茅原に踏込みて行惱める趣なり。無論夜
の事なり

(うち日さす宮にはあれど)つき草の(移情わがもはなくに

内日刺宮庭有跡鴨頭草乃移情吾思名國

移情を從來ウツシゴコロとよめり。宜しくウツロフココロとよむべし。こは女の歌
にて人交ハリノ多キ宮中ニハ居レドモ我ハアダナル心ハ持タヌ事ヨといへるな
り

百爾千爾人は雖言(つき草の)移情吾もためやも

百爾千爾人者雖言月草之移情吾將持八方

初句はカニカクニとよみてイロイロニと心得べし。〇雖言は舊訓の如くイフトモ
とよむべし(古義にはイヘドモとよめり)。初二の意は人ハイロイロニ云寄ルトモと
なり。この移情は古義にはやくウツロフココロとよめり。〇前の歌にはウツロフ心
ワガモハナクニといひ此歌にはウツロフ心ワレモタマヤモといへるを見ても余
がはやく心ヲオモフは心ヲ持ツなりといへるが正しきを知るべし(卷七二頁 初
出)〇以上二首は一聯の歌ならむ

わすれ草わが紐に△著時となくおもひわたれば生跡もなし

萱草吾紐爾著時常無念度者生跡文奈思

第二句を從來ワガヒモニツクとよみたり。宜しく著の上に將を補ひてツケムとよ
むべし。時トナクは斷エズなり。結句は例の如くイケリトモナシとよむべし。〇卷三
(四三七頁)に

わすれぐさわが紐につくかぐ山のふりにし里を忘れぬがため
卷四(七八八頁)に

わすれ草わがした紐につけたれどしこのしこ草ことにしありけり
下にも

わすれぐさ垣もしみみにうゑたれどしこのしこ草猶戀爾家利

とあり。ワスレグサは即今のクワンザウなり。漢名を諼草又萱草一名忘憂といふ。之を衣の紐に附け又は宿に植うれば能く憂を忘るといひ傳へしにてそは毛詩衛風

に
焉得諼草言樹之背

といひ文選なる阮籍の詠懷詩に

萱草樹蘭房膏沐爲誰施

といひ、おなじく江淹の雜體詩に銷憂非萱草といひ、おなじく稽康の養生論に

合歡蠲忿萱草忘憂

といへるなどの傳はりしなり

あかときの目ざまし草とこれをだに見つつかいまして吾止しぬばせ

五更之目不醉草跡此乎谷見乍座而吾止偲爲

シヌバセは偲ビ給へなり。止は乎の誤ならむ。物を贈るに添へたる歌なり。其物は何にか今知るべからず。此歌を寄草一類の歌の中に交へたるは妄なり。目ザマシ草の草は料といふことなればなり

わすれ草垣もしみみにうゑたれどしこのしこぐさ猶戀爾家利

萱草垣毛繁森雖殖有鬼之志許草猶戀爾家利

シミミニは茂クなり。シコノシコ草は萱草を罵りていへるなり。なほ雞、霍公鳥を罵りてクタカケといひシコホトトギスといへるが如し。はやく卷四にも

わすれ草わが下紐につけたれどしこのしこ草ことにしありけり

とあり。さて今も結句はコトニシアリケリとあらざるべからず。コトニシアリケリは名バカリヂヤといふことなり。或は卷一なる

ますらをや片戀せむとなげけどもしこのますらをなほこひにけり

よりまぎれたるにあらざるか

浅茅原小野にしめ結空言もあはむときこそ戀のなぐさに

或本歌曰こむと知志君をしまたまむ又見柿本朝臣人麿歌集然

落句少異耳

浅茅原小野爾標結空言毛將相跡令聞戀之名種爾

或本歌曰將來知志君矣志將待又見柿本朝臣人麿歌集然落句

少異耳

結は舊訓に従ひてユフとよむべし古義にはユヒとよめり初二は空言にかゝれる序なり語例は卷十一に

浅茅原小野にしめゆふむな言をいかにいひてかきみをば待たむ(二三〇五頁)

浅茅原かりじめさし而むな事もよさえし君がことをしまたまむ(二四八三頁)

とあり○空言は古義に従ひてムナゴトとよむべし第三句以下の意はウソニモ逢ハウトノタマへ戀ノ和ムベクとなりムナ言モはムナ言ニモなり

或本の知志を宣長は言志の誤ならむと云へり人麿歌集に見えたるは上に引けるイカニイヒテカキミヲバマタムといふ歌なり

皆人の笠にぬふちふ有間菅ありて後にもあはむとぞもふ

皆人之笠爾縫云有間菅在而後爾毛相等曾念

上三句は序なり舊訓にヒトミナとよみたる上に諸本に人皆とあれば皆人は顛倒と認むべしアリテはナガラヘテなり

みよし野のあきつの小野にかる草のおもひ亂れてぬる夜しぞおほき

三吉野之蜻乃小野爾刈草之念亂而宿夜四曾多

上三句は亂レテにかゝれる序なり

妹待跡三笠の山の山菅のやまざやこひむ命しなずば

妹待跡三笠乃山之山菅之不止八將戀命不死者

初句を略解には妹所服の誤としてイモガキルとよみ古義には妹我服の誤としてイモガケルとよめり二三句のみを序とし初句より第四句につづけるものと認め

てもあるべし

谷せばみ峯邊^{ツタ}はへる玉かづらはへてしあらば年に來ずとも

一云いはづなのはへてしあらば

谷迫峯邊延有玉葛令蔓之有者年二不來友

一云石葛令蔓之有者

卷十一(二四九五頁)に山タカミ谷邊^{ツタ}ハヘル玉カヅラとあり。谷ベニといふべくば峯ベニともいふべきが如くなれど峯ベニはなほ穩ならず。伊勢物語に

谷せばみ峯まではへる玉かづらたえむと人にわが思はなくに

とあり。古義にいへる如く今も峯迄の誤ならむか。○上三句は序なり。ハヘテシアラバは契リテアラバなり。結句は一年中來ル事無クトモヨシとなり

(水莖^{アヘ}の)をかのくず葉をふきかへし面知兒^{アヘ}らが見えぬころかも

水莖之崗乃田葛葉緒吹變面知兒等之不見比鴨

上三句は序にて風ガといふことを略したりとおぼゆ。○面知の事は上二六四一頁

にいへり。變は反の通用なり

赤駒のいゆきはばかるまくず原何のつて言ただにしえけむ

赤駒之射去羽許眞田葛原何傳言直將吉

此歌は元來天智天皇紀に見えたる童謠なり。古風なる上に童謠なれば格に合せては釋きがたけれどタトヒ障ル事アリトモ直ニ言ヒテヨカラムヲイカデ人ヲシテ言ハシムルゾといふ意にて弘文天皇と御叔父天武天皇との御不和を憂ひたる者の作ならむ。○許は計の誤ならむ。許はバカリには借るべくバカルには借るべからず

(ゆふだたみ)たなかみ山のさなかづらありさりてしも今ならずとも

木綿疊田上山之狹名葛在去之毛不令有十方

上三句は序なり。アリサリテシモは時ヲ經テモにて其下に逢ハムといふことを略せるなり。○令は今の誤なり

丹波^{タニ}ぢの大江の山の眞^{マコ}玉^{タマ}葛^{カヅラ}たえむの心わがもはなくに

丹波道之大江乃山之眞玉葛絶牟乃心我不思

上三句は序なり。第三句を舊訓にサナカヅラとよめるを田中道麻呂マタマヅラとよみかへたれどマタマヅラは例なき上に一本に玉の字無ければ玉を衍字としてなほサナカヅラとよむべし。四五は絶エムトスル心ヲ我持タヌ事ヨとなり。卷十四にも

たにせばみみねにはひたるたまかづらたえむのころわがもはななくにとあり

大埼のありその渡はふくずのゆくへもなくやこひわたりなむ

大埼之有磯乃渡延久受乃往方無哉戀渡南

大埼は紀伊の地名なり。いにしへワタリといひしは皆渡津なり。さればアリソノ渡とある不審なり。宣長は第三句をコグ船ノの誤ならむといへれど誤は第二句にぞあらむ。即渡は激の誤ならむ。激をはふ葛は途窮まりてはひ行くべき方なければユクヘモナクの序としたるならむ。○このユクへは行クベキ方にてやがてセムスベなり(二四七一頁参照)

(ゆふだたみ)白月山のさなかづら後もかならずあはむとぞもふ

或本譚曰たえむと妹をわがもはななくに

木綿褰一云白月山之佐奈葛後毛必將相等曾念

或本譚曰將絶跡妹乎吾念莫久爾

眞淵は白月山を田上山の誤とせり。上三句は後モ逢ハムにかゝれる序なり

(はねず色の)うつろひやすきころ有者年をぞきふることはたえずて唐棣花色之移安情有者年乎曾寸經事者不絶而

ハネズは今いふモクレンならむ(二五〇一頁参照)有者はナレバとよむべし。下にも人ヅマナリトを人妻有跡と書けり。キフルはただ經ルといふに同じ。集中に來經とも経往ともいへり。結句は便ノミハ絶エズシテとなり。コトは便なり

かくしてぞ人のしぬちふ藤浪乃ただ一目のみ見し人故に
如此爲而曾人之死云藤浪乃直一目耳見之人故爾

藤浪乃はタダ一目ノミにかゝるべき由なし。古義にいへる如く玉蜻タマカゲルの誤かと思へ

どさらば寄草木歌のうちには交ふべからず

すみのえの敷津の浦のなのりその名はのりてしをあはなくもあやし
住吉之敷津之浦乃名告藻之名者告而之乎不相毛恠

上三句は序なり。女ガ我問ニ答ヘテソノ名ヲノリテシヲとなり

みさごゐるありそにおふるなのりそのよし名は不告おやはしるとも

三佐吳集荒磯爾生流勿謂藻乃吉名者不告父母者知鞞

はやく卷三に

みさごゐるいそみにおふるなのりその名はのらしてよ親はしるとも

或本歌曰みさごゐるありそにおふるなのりそのよし名は告世おやはしるとも

とあり。古義に従ひて不告を令告の誤とすべし。四五は名ヲバノリ給ヘ、ヨシ親ハ知

ルトモといふ意なり。略解はいたく誤解せり

浪のむたなびく玉藻の片念モヒにわがもふ人之言ヲのしげけく

浪之共靡玉藻乃片念爾吾念人之言乃繁家口

ムタはマニマニなり。初二は序なり。片念は片依の誤にあらざるか。又人之は人乎の

誤にて人ナルニといふことならむ。結句は人ノ口ノウルサキ事ヨとなり

わたつみのおきつ玉藻のなびきねむはや來ませ君まてばくるしも

海若之奥津玉藻之靡將寢早來座君待者苦毛

初二は序、ナビキは横タハリなり

わたつみのおきにおひたるなはのりの名はかつてのらじこひはしぬ

とも

海若之奥爾生有繩乘乃名者曾不告戀者雖死

上三句は序なり。カツテは更ニなり。決シテなり(二二二〇頁參照)男ノ名ハ決シテ人

ニ告ゲジとなり。結句はコヒシヌトモにハを挿めるなり

玉の緒を片緒によりて緒をよわみ亂ムス時トキ爾ニこひざらめやも

玉緒乎片緒爾搓而緒乎弱彌亂時爾不戀有目八方

上三句は序にて三四の間にソノ緒ガ絶エテ玉ガといふことを略せるなり。〇時は

おそろくは許の誤ならむ

君にあはず久しくなりぬ(玉の緒の)長き命のをしけくもなし
君爾不相久成宿玉緒之長命之惜雲無

ヲシケクは惜キ事なり

こふること益イヌマ今者たまのをのたえてみだれてしぬべくおもほゆ
戀事益今者玉緒之絶而亂而可死所念

第二句を前註にマサレバ今ハ又はマサレル今ハとよめり宜しく今ユマサラバと
よむべし又タマノヲノタエテの八言を枕辭とすべし玉ノ緒ガ絶エテ玉ガ亂ルル
ヤウニとかゝれるなり

あまをとめかづきとるちふ忘具代にもわすれじ妹がすがたは
海處女潛取云忘具代二毛不忘妹之光儀者

上三句は序なり。ワスレジにかゝれるなり。代ニモを前註に殊ニ、トリ別キテなど譯
したれどこゝの代ニモは世ニモウレシなど形容詞につづけるとは異にて生涯と

いふことなり。一代の間といふことをただ代ニといへるは一年中をただ年ニとい
へると同例なり

朝影に吾身はなりぬ(玉蜻)ほのかに見えていにし子故に

朝影爾吾身者成奴玉蜻髮髯所見而往之兒故爾

はやく卷十一(二二六〇頁)に出でたり。アサ影ニは朝見ユル影ノ如ク細クといふこ
となり。古義に

玉蜻は虫名にあらざる由余が考あり。撰者は蜻字を書くに依て虫名と心得てこ
こにいれしか

といへり

中々に人とあらずば桑子にもならましものを玉の緒ばかり
中中二人跡不在者桑子爾毛成益物乎玉之緒許

コノ物思モナキ蠶ニモ成ラムモノヲとなり。卷六(一〇五二頁)に鶉ニシモアレヤ家
モハザラムとよめるに似たり。蠶を思へるは女の歌なればなり。二註に「蠶は雌雄は

なれぬものなれば云々」といへるはいみじきひが言なり。蓋に雌雄あらむや○玉ノ緒バカリはシバシといふことなり○卷三にも

中々に人とあらずば酒壺になりてしがも酒にしみなむ

とあり

(眞菅よし)宗我の河原になく千鳥聞なしわが背子わがこふらくは

眞菅吉宗我乃河原爾鳴千鳥間無吾背子吾戀者

眞菅は推古天皇紀の御歌に摩蘇餓豫ソガノコラハとあればマスゲとよまでマスガとよむべし。ヨシはヨヲなどに似たる助辭にて青土ヨシ麻裳ヨシなどのヨシなり○上三句は序なり○ツガ川はノトセ、ヒノクマ二川の合流なり

戀ごろもきならの山になく鳥の聞なく時なしわがこふらくは

戀衣著猶乃山爾鳴鳥之間無時無吾戀良苦者

上三句は序、初六言は枕辭なり。奈良山は奈良の北方に靡けり。戀は古義に従ひて辛などの誤とすべし。猶は櫛の誤なり

(とほつ人)かりぢの池にすむ鳥の立毛居毛君をしぞもふ

遠津人獵道之池爾住鳥之立毛居毛君乎之曾念

第四句を從來タチテモキテモとよめり。宜しくタチニモキニモとよむべし。ニに當る字を略せるは下にヘニモオキニモを邊毛奥毛と書けるに同じ。上三句は序
葦邊ゆく鴨の羽音のおとのみにききつつもとなこひわたるかも

葦邊往鴨之羽音之聲耳聞管本名戀渡鴨

初二は序なり。オトノミニはウハサニバカリなり

鴨すらもおのがつまどちあさりしておくる聞爾こふちふものを

鴨尙毛己之妻共求食爲而所遣間爾戀云物乎

二三は夫婦相タグヒテといふことなるを鴨なればアサリシテといへるなり○間爾は間谷の誤ならむ。古義にトビタチ行トキと補譯せるは誤解なり。あさりする間に片方の後るゝを云へるなり

(しらまゆみ)斐太の細江の菅鳥の妹にこふれやいをねかねつる

白檀斐太乃細江之菅鳥乃妹爾戀哉寢宿金鶴

菅鳥ノヤウニといへるなり。菅鳥はいかなる鳥にか知らず。山崎美成の海録にはヨシキリなりと云へり。斐太は飛驒なり。細江は宮川の支流なりしが今は埋もれたりといふ

しぬの上に来ゐてなく鳥めをやすみ人妻ゆゑにわれこひにけり

小竹之上爾來居而鳴鳥目乎安見人妻妬爾吾戀二來

初二はメ(群)にかゝれる序なりと眞淵いへり。メヲヤスミはウルハシサニなり。人妻ユエニは人妻ナルモノヲなり

物もふといねずおきたるあさけにはわびてなくなりにはつとりさへ

物念常不宿起有且開者和備氏鳴成鶏左倍

二三は寢ズシテ起キ居タル夜ノ且ニハとなり。ワビテは勢ヨクのうらなり。庭鳥ノ聲サヘカヌケシタルヤウニ聞ユといへるならむ

朝がらすはやくななきそわが背子があさけのすがた見者かなしも

朝鳥早勿鳴吾背子之且開之容儀見者悲毛

アサケノスガタは夜明ケテ歸行ク姿なり。上二五四七頁にも

わがせこがあさけのすがたよく見ずてけふのあひだをこひくらすかも

とあり○見者はミナバとよむべし。ミナバといはばカナシカラムといふべきを例の如く現在格にて受けたるなり。カサネバウトシなどと同格なり

うませごしに麥はむ駒ののらゆれどなほしこふらくしぬび不勝鳥

柜楮越爾麥咋駒乃雖詈猶戀久思不勝鳥

ウマセは馬塞^{ウマサヘ}にて馬フセギなり。今も垣の一種をマセといふは此語のうつれるなり。初二は序なり。ノラユレドは罵ラルレドなり○不勝鳥を二註に鳥を例の如く焉の俗字としてカネツモとよめり。鳥を乍の誤字としてカネツツとよむべきか。柜は拒の誤か

さひのくまひのくま河に駐馬馬に水かへわれよそに見む

左檜隈檜隈河爾駐馬馬爾水令飲吾外將見

サヒノクマは准枕辭なり。駐馬は古義に従ひてウマトドメとよむべし。略解にはコマトメテとよめり。ヨソニは外ナガラなり。古今集なる大歌所の歌に

ささのくまひのくまがはに駒とめてしばし水かへ影をだに見む

とあるは此歌を唱へかへたるなり。但ササノクマとあるはあやなし。ヒノクマにサといふ辭を添へて准枕辭としたるなればサヒノクマとあらではかなはざるなり。おのれ故のらえてをれば驪馬ウツマの面高夫オモカウ駄ツタにのりて來べしや

於能禮故所詈而居者驪馬之面高夫駄爾乘而應來哉

右一首平群文屋朝臣益人傳云。昔聞紀皇女竊嫁高安王被責之

時御作此歌。但高安王左降任之伊與國守也

紀皇女の御作にてオノレは汝といふにひとし。古今集誹諧歌にも

あしひきの山田のそほおのれさへ我をほしといふうれはしき事

とあり。己と汝とはいにしへ相通はしし例あり。たとへば神名の大己オホナミチ貴も己をナに當てたり。二七五〇頁參照。さてオノレとは高安王を指し給へるにて親シヤクシのあまりに

悔りのたまへるなり。○ノラエテヲレバは叱ラレテ居ルニなり。○驪馬はアヲウマとよむべし。從來アシゲウマとよめり。○フタはフトウマ(肥馬)をつづめてフツマといふを更につづめたるにて佛足石歌にソナハレル、ノコセル、メヅラシをソダレル、ノケル、メダシといへると同例なり。抑語をつづむるにも程こそあれ、かく程を越えてつづめむはうべなひがたき事なれば當時も此等は雅言とは認められざりけむ。右の如くなればオモダカブタは面ヲ高ク舉ゲタル肥馬フトウマなり。○さて一首の趣は高安王が忍びても來べきをいとはえはえしくて來るを咎め給へるなり。先哲が此歌を誤解せるは左註に但高安王左降任之伊與國守也とあるに誤られたるなり。此十三字は無用の註文なり

紫草シスダクを草とわくわくふす鹿の野はことにして心は同じ

紫草乎草跡別別伏鹿之野者殊異爲而心者同

紫草は中山巖水の説に従ひて柴草の誤とすべし。柴草は芝草なり。草は薄なり。ワクワクは分ケツツなり。鹿は芝草の生ふる處を擇びて寝る習ありと見ゆ。以上三句はココロハ同ジにかゝれる序なり。臥ス鹿ノヤウニと心得べし。○四五はもと心ハ同

ジ野ハコトニシテとありしを顛倒せるにや。野ハ殊異ニシテは我ト君ト處ヲバ異ニシテといふことを序なる鹿の縁にて野ハといへるならむ

おもはぬをおもふといはば眞鳥すむ卯名手の杜の神ししらすむ

不想乎想常云者眞鳥住卯名手乃杜之神思將御知

卷四に

おもはぬを思ふといはば大野なる三笠の杜の神ししらすむ

念はぬをおもふといはばあめつちの神もしらすむ邑禮左變

とあり。又卷七(一四一五頁)に眞鳥スムウナデノモリノ菅ノ根ヲとあり。マトリスムは准枕辭にてマトリは鶯なり。○シラサムは知シメシテ罰シ給ハムとなり。もし古義にいへる如く掌ラムの意ならば必或神をこそ指定すべけれ。卷四の後の歌の如くアメツチノ神モとはいふべからず

問答歌

紫者灰さすものぞつば市の八十のちまたに相兒やたれ

紫者灰指物曾海石榴市之八十街爾相兒哉誰

紫者は紫煮の誤なり。紫草の根にて衣を染むる時色のうつろはざらむ爲に海石榴の灰をさす事なればツバ市の序に紫ニ灰サスモノゾといへるなり。○相は舊訓に従ひてアヘルとよむべし(古義にはアヒシに改めたり)。うちつけに其女に問ひたるなり

(たらちねの)母がよぶ名をまをさめど路行人をたれと知りてか

足千根乃母之召名乎雖白路行人乎孰跡知而可

右二首

行は古義に従ひてユクとよむべし(舊訓にはユキとよめり)結句の次に申サムといふことを略せるにて所詮マヅ御名ヲキカセ給へといへるなり

あはなくはしかもありなむ(玉づさの)使をだにもまぢやかねてむ

不相然將有玉粹之使乎谷毛待八金手六

初二は來り逢ハヌ事ハ障ル事アリテナルベケレバ是非モナシといへるなり○マ
チヤカネテムはマチカネテアラムヤハとなり

あはむとは千たびおもへどありがよふ人眼をおほみこひつつぞをる
將相者千遍雖念蟻通人眼乎多戀乍衣居

右二首

アリガヨフはカヨフの反復又は持續を示す格なり

人目おほみただにあはずてけだしくもわがこひしなば誰名將有裳
人目多直不相而蓋雲吾戀死者誰名將有裳

ケダシクモはモシヒョットなり。結句は舊訓に従ひてタガ名ナラムモとよむべし。
モは助辭にて卷十七なる

いへにしてゆひてしひもとときさけずおもふこころを多禮賀思良牟母
と同格なり。宣長(玉緒七卷十四丁)がタガ名ニカアラモとよみ改めたるはわろし。さ
てタガ名ナラムモはタガ名立ナラム、ソコノ名立ナラズヤといふ意なり

相見まく欲爲者君よりも吾ぞまさりていぶかしみする
相見欲爲者從君毛吾曾益而伊布可思美爲也

右二首

第二句を略解にホシケクスレバとよみ古義に爲を有の誤としてホシケクアレバ
とよみたれど、まづホシクを延べてホシケクといふ事なし。ホシキタメニハとよむ
べきか○イブカシミスルは物ヲ思フといふに近し。下に將鬱悒をイブカシミセム
とよめり

(うつせみの)人目をしげみあはずして年の經ぬれば生跡もなし
空蟬之人目乎繁不相而年之經者生跡毛奈思
(うつせみの)人目しげくばぬばたまのよるのいめにをつぎて見えこそ
空蟬之人目繁者夜千玉之夜夢乎次而所見欲

右二首

ヲは助辭なり

ねもころに憶^{オモフ}吾妹^{ワギモ}を人言のしげきによりてよどむころかも

慇懃憶吾妹乎人言之繁爾因而不通比日可聞

妹ヲは妹ナルヲなり古義にこの憶吾妹をも上二五八六頁なるウツクシト念吾妹
ヲイメニ見テをも、ワガオモフイモの顛倒としたるはかたくなし。オモフの上の主
格は略してもあるべきならずや

人言のしげくしあらば君も吾もたえむといひてあひしものかも

人言之繁思有者君毛吾毛將絶常云而相之物鴨

右二首

君モ吾モを初句の上におきかへて心得べし。モノカモはモノカハなり
すべもなき片戀をすところのころにわが死ぬべきはいめに見えきや
爲便毛無片戀乎爲登比日爾吾可死者夢所見哉
いめに⁺見て衣をとり服よそふ間に妹が使ぞさきだちにける
夢見而衣乎取服装束間爾妹之使曾先爾來

右二首

初二の間にトク妹ガリ行カムトといふことを補ひて聞くべし

在有^{アリ}而後^{ナリ}もあはむと言のみをかたく要^ヒつつあふとはなしに

在有而後毛將相登言耳乎堅要管相者無爾

古義に上なる

ゆふだたみたなかみ山のさなかづら^{アリサリテ}在去^{サレ}之毛^モ今ならずとも
といふ歌を引きて在有而はアリサリテとよむべしといへり。此訓よろし。但有は去
の誤字ならむ。卷四(八三一頁)にも有去而今ナラズトモ君ガマニマニ又卷十七にも
阿里佐利底ノチモアハムトオモヘコソとあり○要は眞淵のイヒとよめるに従ふ
べし。三首次にもアハジト要^ヒシコトモアラナクニとあり。さてイヒツツの下にスル
事ヨなどいふ事を略せるなり

極^{アリサリテ}而^{ナリ}吾もあはむとおもへども人の言こそしげき君なれ

極而吾毛相登思友人之言社繁君爾有

右二首

極而は在去而の誤ならむ

いきのをにわがいきづきし妹すらを人妻なりと聞者かなしも

氣緒爾言氣築之妹尙乎人妻有跡聞者悲毛

イキノヲニイキヅクは命ニカケテ嘆キ思フといふことなり○スラは主格を強む
る辭なり。聞者は舊訓の如くキケバとよむべし略解にはキクハに改めたり

わが故にいたくなわびその後つひにあはじといひしこともあらなくに
我故爾痛勿和備曾後遂不相登要之言毛不有爾

右二首

門たてて戸も閉たるをいづくゆか妹が入來て夢に見えつる

門立而戸毛閉而有乎何處從鹿妹之入來而夢所見鶴

門タテテは門ヲ閉ヂテなり。閉は契沖宣長のサシとよめるに従ふべし。サシタルは
戸ジマリヲシタルなり

門たてて戸は闔たれど盜人の穿穴從いりて所見牟

門立而戸者雖闔盜人之穿穴從入而所見牟

右二首

穿穴從を略解にエリタルアナユとよみ古義にエレルアナヨリとよめり。宜しくウ
ガテルアナユとよむべし○所見牟を古義に牟を乎の誤としてミエシヲとよめり。
そのヲはヅにかよふヲなり

明日よりはこひつつあらむこよひだにはやくよひよりひもとけ我妹

從明日者戀乍將在今夕彈速初夜從緩解我妹

略解に

旅立ん前夜なるべし。上のヨヒは一夜の事、下のヨヒは字の如く初夜をいへり
といへる如し○緩は諸本に綏とあるに従ふべし。綏はヒモとも訓むべし。論語郷黨
第十に升車必正立執綏とあり

今更にねめや我背子(荒田麻之)ひと夜もおちずいめに見えこそ

今更將寢哉我背子荒田麻之全夜毛不落夢所見欲

右二首

上二五四七頁に新夜ノヒト夜モオチズ夢ニシ見ユルとあり。之によりて雅澄は麻を夜の誤とせり。元暦校本にも夜とあり。アラタ夜は立代り來る夜なりわがせこが使をまつと笠も著ずいでつつぞ見し雨のふらくに吾勢子之使乎待跡笠不著出乍曾見之雨零爾

はやく卷十一(二四三七頁)に見えたり。イデツツといへるは度々出づるなり。フラクニはフルニを延べたるなり

心なき雨にもあるか人目もりともしき妹にけふだにあはむを
無心雨爾毛有鹿人目守乏妹爾今日谷相牟

右二首

人目モリは人目ナキヲ伺ヒテなり。トモシキ妹はユカシキ妹なり。○牟は諸本に乎とあり

ただ獨ぬれどねかねてしろたへの袖を笠に著ぬれつつぞこし
直獨宿杼宿不得而白細袖乎笠爾著沾乍曾來
雨もふり夜も更深△利いまさらに君將行哉紐ときまけな
雨毛零夜毛更深利今更君將行哉紐解設名

右二首

深の下にげに氣などのおちたるならむ。第四句を舊訓にキミハユカメヤとよめるを古義に下に印南を將行と書けるを例としてキミイナメヤモとよめり。ヒモトキマケナは紐解設ケムにて相寝む設をせむとなり。○男の來はせしかど故ありて徒に歸らむとするを引留めてよめるにや

(ひさかたの)雨のふる日を我門に簑笠きざて來有人やたれ
久堅乃雨零日乎我門爾蓑笠不蒙而來有人哉誰

古義に簑を字鏡に爾乃と見え方言にもニノといふ處ありといひてニノとよみたるは泥みたり。ニとミとは相通ふ例多かれどニが古くミが新しとは定まらず。又同

書に字音のニとミとを一つに視たるは義門の男信を見るに及ばずして云へるなれば深く咎むべからず○來有は古義に従ひてケルとよむべし。但ケルは來タルなり。來ケルにあらず

まきむくのあなしの山に雲ゐつつ雨はふれどもぬれつつぞこし

纏向之痛足乃山爾雲居乍雨者雖零所沾乍鳥來

右二首

耳にはさはらねどツツ二つあり

羈旅發思

わたらひの大河のへのわか歴木わが久在者妹戀かも

度會大河邊若歷木吾久在者妹戀鴨

ワタラヒノ大河は宮川ならむ。歷木は眞淵に従ひてヒサギとよむべし。上三句は序なり。四五は古義に従ひてヒサナラバとよみコヒムとよむべし

吾妹子をいめに見えことやまと路のわたり瀬ごとに手向吾爲

吾妹子夢見來倭路度瀬別手向吾爲

ワギモコヲのヲはヨなり。結句は略解の如くタムケワガスルとよむべし。古義にはゾを添へてタムケゾワガスルとよめり

さくら花さきかもちると見るまでに誰ここに見えてちりゆく

櫻花開哉散及見誰此所見散行

サキは見エテに當りチリはチリユクに當れるなり。古義に「集中にサキチリといふこと多ければサクラ花ノチルカと云意となれり」といへるは非なり○誰を二註にタレカモとよめるはわろし。タレゾモとよむべし○旅中にて故郷人に逢ひて久米廣繩が越前の國府にて家持に逢ひしごとく別るゝ時によめるにや

豊くにのきくの濱松心喪なにか妹に相之始

豊州聞濱松心喪何妹相之始

右四首柿本朝臣人麿歌集出

初二は序なり。キクは豊前の企救^{キク}なり。○心喪を略解に

宣長は心喪の字は誤にてネモコロニとあるべき所なりといへり。春海云。喪は衷の誤か。字書に衷は誠也とあれば心衷を義もてネモコロとよむべし。といへりといひ雅澄はココロイタクとよめり。ココロイタクといふ語は集中に是彼見えたれどこゝはココロイタクとよみては序よりつづかず。されば卷十一(二三二一頁)なる

いその上にたてるむろのき心衷などかふかめておもひそめけむの心衷を心衷の誤としてネモコロニとよみし如く今も心衷の誤としてネモコロニとよむべし。○結句は一本に相云始[△]とあり。前註は之に従ひてアヒヒソメケムとよめり。宜しくアヒヒソメシとよむべし。○妹といへるは豊國にて逢初めし女なり

月かへて君をば見むと念鴨^{オモヒツル}日もかへずして戀^{シゲケク}の重

月易而君乎婆見登念鴨日毛不易爲而戀之重

第三句を従來オモヘカモとよめるは非なり。念鶴の誤としてオモヒツルとよみて

思ヒツルヲと心得べし。○重を略解にシゲケキとよみ古義にシゲケムとよめり。シゲケキといふ辭は無し。シゲケクとよみて繁カル事ヨの意とすべし。○羈旅發思の歌なれば男の作なるべし。女を指しても君といへる例はあまたあり

なゆきそとかへりも來やとかへりみにゆけど不歸^{カハラズ}道の長手を

莫去跡變毛來哉常願爾雖往不歸道之長手矣

不歸を舊訓にカヘラズとよめるを古義にユカレズに改めたるはわろし。道ノナガ手ヲはユケドにかゝれるにてカヘラズにかゝれるにあらず。○一首の意は我ヲ送リテ一たび去リシ人ノナユキソト云ヒテ歸リモ來ヤト思ヒテカヘリ見ツツ道ノ長手ヲ行ケド其人ハ終ニ歸來ラズといへるなり

たびにして妹をおもひでいぢろく人の知るべくなげきせむかも

去家而妹乎念出灼然人之應知歎將爲鴨

カモはカハにあらず。モは助辭のみ

里さかり遠からなく(草まくら)旅としもへばなほこひにけり

里離遠有莫國草枕旅登之思者尙戀來

里サカリは故郷ヲ離レテなり。卷九なる

ふる山ゆただに見わたすみやこにぞいをねすこふる遠からなくに
と相似たる所あり

近かれば名のみもききてなぐさめつこよひゆ戀のいやまさりなむ
近有者名耳毛聞而名種目津今夜從戀乃益益南

二三の間に逢フ事ハアラデモ、三四の間に今日旅立チヌレバといふことを挿みて
聞くべし。名ノミモキキテは名ヲダニ聞キテなり

たびにありてこふればくるしいつしかもみやこにゆきて君が目をみ
む

客在而戀者辛苦何時毛京行而君之目乎將見

遠かればすがたはみえず常のごと妹がゑまひはおもかげにして
遠有者光儀者不所見如常妹之咲者面影爲而

二三の間に然モといふことを挿みて聞くべし。オモカゲニシテのシテは助辭にて
其下に見ユを略せるにて常ノゴトはその見ユにかゝれるなり

年もへず反來嘗跡朝影爾まつらむ妹が面影にみゆ

年毛不歷反來嘗跡朝影爾將待妹之面影所見

第二句は略解の如くカヘリコナムトとよむべし。歸來ヨカシトとなり。古義にカヘ
リキナメドとよめるは非なり。第三句は眞淵が影を異の誤としてアサニケニと
よめるに従ふべし。アサニケニは毎日なり

(玉梓の)道にいでたちわかれこし日より于念わする時なし

玉梓之道爾出立別來之日從于念忘時無

于念を從來オモフニとよめり。宜しくオモヒニとよむべし。オモヒニは心ニなり。○
ワスル時といへるは例の如く連體格の代に終止格をつかひたるなり

はしきやししかる戀にもありしかも君におくれてこひしくもへば
波之寸八師志賀在戀爾毛有之鴨君所遺而戀敷念者

君ニオクレテといへるを思へば故郷に留まれる女の歌なり。されば嚴重にいにはば
羈旅發思歌中には入るべからず。○ハシキヤシは二三句を隔て、君にかゝれるに
や。○コヒシクは戀シカル事ヲといふ意なり。卷十二(二一〇頁)にもコヒシクノケナ
ガキ我ハミツツシヌバムとあり。○一首の意たしかにはさとりがたし。君ガ故郷ニ
アリシ間ハタダニクカラズノミオボエシガカク君ニオクレテ戀シカルヲ思へバ
シカ深キ戀ニモアリシカといふ意にや。アリシカモのモは助辭のみ

(草枕)たびのかなしくあるなべに妹をあひ見て後こひむかも

草枕客之悲有苗爾妹乎相見而後將戀可聞

カナシクアルナベニは妹ヲアヒ見テにかゝれるなり。旅ノ悲シキママニソヲ慰メ
ムトテ女ヲアヒ見シガ其女ニ又後コヒムカといへるなり

國とほみただにはあはずいめにだに吾にみえこそあはむ日までに
國遠直不相夢谷吾爾所見社相日左右二

マデニはマデハと心得べし

かくこひむものとしりせば吾妹兒にことどはましを今しくやしも

如是將戀物跡知者吾妹兒爾言問麻思乎今之悔毛

第四句はヨク話ヲシテ來ベカリシヲとなり

たびの夜の久しくなればさにづらふ紐開さけずこふるこのごろ

容夜之久成者左丹頰合紐開不離戀流比日

サニヅラフ紐は赤紐にて衣の紐なり。開は古義の如くアケとよむべし。紐にアクル
といへる例は卷十一(二二六七頁)に擧げたり。さて紐アケサケズは丸寐する事にて
作者即男の上なり。略解にこれを故郷なる女の事とせるは誤解なり。久シクナレバ
はコフルコノゴロにかゝれるなり。○容は客の誤なり

吾妹兒しあをしぬぶらし(草まくら)旅の丸寢に下紐解

吾妹兒之阿乎偲良志草枕旅之丸寢爾下紐解

さる俗信によりてよめるなり。解は舊訓の如くトケヌとよむべし(二註にはトケツ
とよめり)

(草まくら)旅のころもの紐解トケヌ所念ユル鴨カモ此年イモ比者コノゴロ

草枕旅之衣紐解所念鴨此年比者

解は略解に従ひてトケヌとよむべし。四五を二註にオモホセルカモコトシゴロハとよめるは非なり。此年を妹爾の誤としてオモハユルカモイモニコノゴロとよみて此頃妹ニ偲バルルカといふ意とすべし。

(草まくら)たびの紐解トケヌ家の妹し吾ワ之ヲまぢかねてなげかすらしも

草枕客之紐解家之妹志吾之待不得而嘆良霜

解はトケヌとよむべし。二註にトクとよめり。之は二註にいへる如く乎の誤なり。

(玉くしろ)まきねし妹を月も經ツずおきてやこえむこの山の岫サキ

玉釵卷寢志妹乎月毛不經置而八將越此山岫

月モ經ズは逢始メテイマダ月モ經ズなり。岫は二註にいへる如く岬の誤なり。

(梓弓)末はしらねどうつくしみ君にたぐひて山ぢこえきぬ

梓弓末者不知杼愛美君爾副而山道越來奴

任國に下る男に従ひ行く女ハシのよめるならむ。末ハシラネドは末ニハ棄テラレムカ知ラネドとなり。ウツクシミはイトホシサニなり。

かすみたつ春長日ハルナガヒをおくかなくしらぬ山路乎こひつつかこむ

霞立春長日乎奥香無不知山道乎戀乍可將來

春長日を二註に卷一以下に長春日とありといひて長春日の顛倒とせり。秋ノ長夜と同例にて春ノ長日ともいひつべきにあらずや。○オクカナクは上(二六五五頁)に見えたるオクカモ知ラズと同意ならむ。さらばアテモ知ラズとうつつすべし。○山道乎は山道ユとあらむ方まされり。第二句の乎と重なりていたく耳にさはればなり。或は誤字ならむ。○コヒツツカコムは妹ニコヒツツ行カムカにて此歌は獨任國に下る男のよめるなり。

よそのみに君をあひ見て(ゆふ)だたみ手向の山をあすかこえ將去

外耳君乎相見而木綿牒手向乃山乎明日香越將去

ヨソノミニはヨソナガラノミニなり。タムケノ山は奈良と山城との界の峠なり。將去は古義に従ひてイナムとよむべし。略解にはナムとよめり。○眞淵は之を父に伴ひ

て縣に下らむとする女の歌とせり。げに女の歌ならむ方おもしろし

(玉勝間)安倍島山のゆふ露に旅宿得爲也ながき此夜を

玉勝間安倍島山之暮露爾旅宿得爲也長此夜乎

第四句は古義に従ひてタビネエセメヤとよむべし。二註に卷十一なるオモワスレ
ダニモ得爲也トを例に引きたれど彼は不爲也の誤としてセズヤとよむべき事彼
卷(一三七八頁)にいへる如し。○露は霧の誤ならむ

み雪ふる越の大山ゆきすぎていづれの日にか我里をみむ

三雪零越乃大山行過而何日可我里乎將見

越より歸り上る人のよめるなり。越ノオホ山は越前後の加賀の白山か。ユキスギヌ
といはでユキスギテ云々といへるを見ればいまだ其山をば過ぎぬなり。ワガ里は
ワガ故郷にて即京なり

いでわが駒はやくゆきこそ(まつち山)まつらむ妹をゆきてはや見む

乞吾駒早去欲亦打山將待妹乎去而速見牟

このイデはドウヅなり。ユキコソは行ケカシなり。紀伊より歸り上る人の作なり

あしき山こぬれことごとあすよりはなびきたりこそ妹があたり見む

悪木山木末悉明日從者靡有社妹之當將見

ナビキタリコソは靡キテアレカシなり。妹ガアタリは故郷の方なり。其國に著きし
日によめるなり

鈴鹿河八十瀬わたりてたが故か夜ごえにこえむ妻もあらなくに

鈴鹿河八十瀬渡而誰故加夜越爾將越妻毛不在君

略解に

此川同じ山河をあなたこなたといく度も渡ればかくいへり。旅なる程家の妻の
身まかりし後に歸るとてよめるか

といへる如し

吾妹兒に又もあふみのやすの河やすいもねずにこひわたるかも

吾妹兒爾又毛相海之安河安寢毛不宿爾戀渡鴨

上三句は序なり。初二は吾妹兒ニ又モアフを近江にいひかけたるなり。即ワギモコニ又モの八言は近江にかゝれる序のみ。略解に「妹に別て旅に在て又もあはばやといふをこめたり」といへるは序なることを忘れたるなり

たびにありて物をぞおもふ(しら浪の)へにもおきにもよるとはなしに客爾有而物乎曾念白浪乃邊毛奥毛依者無爾

四五は邊ニ寄ルトモ無ク沖ニ寄ルトモ無クテといへるにて思案の定まらざるを云へるか

みなと轉にみちくるしほのいやましにこひはまされど忘らえぬかも湖轉爾滿來盪能彌益二戀者雖剩不所忘鴨

初二は序なり。古義に

湖轉はミナトミと訓べし。三卷にも石轉とあり。轉は回とかかむが如しといへり(四五三頁参照)コヒハマサレドはコヒマサレドにハを挿めるなり

おきつ浪邊浪の來よるさだの浦の此さだすぎて後こひむかも

奥浪邊浪之來依貞浦乃此左太過而後將戀鴨

はやく卷十一(二四六七頁)に出でたり。サダは雅澄のいへる如く時といふことなり

(ありちがた)ありなぐさめてゆかめども家なる妹いいぶかしみせむ
在千方在名草目而行目友家有妹伊將鬱悒

初句は行手の地名を以て枕とせるなり。上にマツチ山マツラム妹ヲユキテハヤ見ムといへるに似たり。アリナグサメテは慰メツツなり。妹イのイは一種の助辭なり。イブカシミセムは物思セムとなり

(みをつくし)心つくしておもへかもここにももとないめにし見ゆる

水咫衝石心盡而念鴨此間毛本名夢西所見

ミヲツクシは水路標なり。ツはノにかよふ助辭なり。略解に「水の深淺をはかる杓なり」といへるはをさなし。さてこのミヲツクシは契沖のいへる如く難波なるを見てよめるならむ。二三の主格は妹なり。ココニモといへるは故郷なる妻より夢ニ見ユといふ意の歌をよみておこせたるに對していへるならむ。〇咫は誤字とおぼゆ

わぎもこにふるとはなしにありそ回まわにわがころもではぬれにけるか
も

吾妹兒爾觸者無二荒磯回爾吾衣手者所沾可母

アリツ回ニの下に觸レテを補ひて心得べし

室の浦のせとの崎なる鳴島の磯こす浪にぬれにけるかも

室之浦之湍門之崎有鳴島之磯越浪爾所沾可聞

鳴島を舊訓にナキシマとよみ二註にナルシマとよめり。其名今は残らざればいづれとも定めがたし。播磨の古き地誌にナキシマとあれど、そは本書の舊訓によりて書けるなれば證とはしがたし

(ほととぎす)とばたの浦にしく浪シラガの屢君を見むよしもがも

霍公鳥飛幡之浦爾敷浪之屢君乎將見因毛鴨

上三句は序なり。トバタノ浦は筑前にあり。シクは類ルなり。○屢はシクシクとよむべし

吾妹兒をよそのみや見むこしのうみのこがたのうみの島ならなくに

吾妹兒乎外耳哉將見越懈乃子難懈乃島楢名君

ヨソノミヤは外ナガラニノミヤなり。この吾妹兒に旅中にて見し女なり

浪間ナミマ從雲ユみにみゆる粟島のあはぬものゆる吾ワに所依ヨル子コら

浪間從雲位爾見粟島之不相物故吾爾所依兒等

初句は古義に従ひてナミノマユとよむべし。クモキニは遙ニなり。上三句は序なり。○所依を二註にヨスルとよめり。宜しくヨレルとよむべし。マダ逢ハヌモノカラ我ニ心ヲ寄セタリとなり

(ころもでの)眞若の浦のまなごづちまなく時なしわがこふらくは

衣袖之眞若之浦之愛子地間無時無吾戀饜

初句はいかにかゝれる枕辭にか知るべからず。兩袖を眞袖といへば眞の一言にかかれるかともいへり。マナゴヅチは砂地なり。はやく卷七(一四五七頁)にトヨ國ノキクノ濱邊ノマナゴヅチとあり。上三句は序なり。○古義の歌釋はいたく誤れり

能登の海につりするあまのいざり火の光に伊往、月まちがてり
能登海爾釣爲海部之射去火之光爾伊往月待香光

伊往を略解にイユクとよめるを古義には舊訓に従ひてイマセとよめり。人に對して云はむとならば月出デテ後ニ行ケとこそいふべけれ。されば略解の訓に従ふべし。

しかのあまの釣にともせるいざり火のほのかに妹をみむよしもがも
思香乃白水郎乃鈎爲燭有射去火之髣髴妹乎將見因毛欲得

シカは筑前の志珂なり。上三句は序〇爲は爾の誤か

難波がたこぎ出船のはろばろにわか來ぬれど忘れかねつも

難波方水手出船之遙遙別來禮杼忘金津毛

水手出を二註にコギデシとよめり。宜しくコギヅルとよむべし。その船は己が船にあらず。作者は陸上にありて人の船を漕ぎ出づるを見てやがてそを序につかへるなり。

浦回こぐ能野舟附めづらしくかけて思はぬ月も日もなし

浦回撈能野舟附目頼志久懸不思月毛日毛無

能は熊の誤なる事明なり。熊野舟は卷六にトモシカモヤマトヘノボル眞熊野の船(一〇五四頁)また眞熊野ノ小船ニソリテオキベコグミユ(一一四七頁)とありて熊野式の船なり。〇二註に一本によりて附を泊の誤として第二句をクマヌフネハテとよめり。附はおそらくは能などの誤ならむ。〇三四は心ニカケテメダク思ハヌとなり。

まつら舟亂ほり江のみをはやみかぢとる間なくおもほゆるかも
松浦舟亂穿江之水尾早穢取間無所念鴨

カヂトルまでが序なり。くはしくは梶取ル間ナキ如ク間ナクとかゝれる序なり。〇マツラ舟も松浦形の船なり。はやく卷七(一二六九頁)にさよふけてほり江こぐなるまつら船梶のと高しみをはやみかも

とあり。熊野形松浦形の船を熊野船松浦船と云へると同例なるは續日本後紀なる

新羅船なり。即同書に

承和六年秋七月丙申令太宰府造新羅船以能堪風波也

同七年九月丁亥對馬島司言、傳聞新羅船能凌波行。望請新羅船六隻之中分

給一隻聽之

とあり○亂を略解にサワグとよみ古義にミダルとよめり。卷三にもミダレイヅ見
ユアマノツリ船とあれば古義の訓よろしきに似たれどミダルは後世のミダスな
れば船の亂るゝさまならばミダルといはざるべからず強ひていはば連體格に
てミダルルといふべきを終止格にていへるなりともいふべけれどよりて思ふに
亂はマガフとよむべきにあらざるか。マガフは混亂することなり。集中にもチリノ
マガヒなどよめり。ともかくも初二はあまたの松浦船の難波堀江を亂れ浜るさま
をうつせるなり

いざりするあまの櫛音ウヅネゆくらかに妹が心にのりにけるかも

射去爲海部之櫛音湯鞍干妹心乘來鴨

初二は序なり。櫛音は古義に従ひてカヂノトとよむべし。ユクラカニはユラユラト

なり。第四句は妹が我心ニなり。形ある物の乗るになぞらへてユクラカニといへる
なり

わかワカの浦に袖さへぬれて忘貝ワシひりへど妹は忘らえなくに

或本歌末句云わすれかねつも

若乃浦爾袖左倍沾而忘貝拾跡妹者不所忘爾

或本歌末句云忘可禰都母

(草まくら)たびにしをればカかりごものミみだれて妹にこひぬ日はなし

草枕羈西居者薦之擾妹爾不戀日者無

しかのあまの儀にかりほすなのりその名はのりてしを如何ナニあひがた
き

然海部之儀爾苧干名告藻之名者告手師乎如何相難寸

上三句は序なり。如何を二註にイカデとよめるはわろし。古き書にイカデといへる

例なければなり。宜しくナニヅなどよむべし(卷十四にも奈仁曾コノコノココダカ
ナシキとあり)○上なる

すみのえのしき津のうらのなのりその名はのりてしをあはなくもあやし
と相似たり

國とほみおもひなわびそ風のむた雲のゆくなす言はかよはむ
國遠見念勿和備曾風之共雲之行如言者將通

この國は故郷にあらず。作者の居る國なり。旅先より故郷の妻にいひやれるなり○
ムタはマニマニなり

とまりにし人を念爾あきつ野にゐるしら雲のやむ時もなし
留西人乎念爾野居白雲止時無

三四は序なり。念爾は念久の誤か。さらばオモハクとよみてオモフヤウハと心得べ
し

悲別歌

うらもなくいにし君ゆゑあさなまもとなぞこふるあふとは無杼
浦毛無去之君故朝且本名烏戀相跡者無杼

ウラモナクは心モナクなり。無心ニテなり。何トモ思ハズなり。上二六一五夏にもウ
ラモナクアルラム兒ユエコヒワタルカモとあり○無杼は宣長の説に従ひて無荷
の誤とすべし○此部類の歌の中には別るゝを悲めると別れたるを悲めるとあり。
此歌などは後者に屬せり

しろたへの君が下紐吾さへに今日むすびてなあはむ日のため
白細之君之下紐吾左倍爾今日結而名將相日之爲

こは男の歌にて吾サヘニは吾サヘ手ヲ添ヘテといへるなり
しろたへの袖のわかれはをしけどもおもひ亂れてゆるしつるかも
白妙之袖之別者雖惜思亂而赦鶴鴨

ソデノワカレは分袖を自動詞にうつせるなり。ヲシケドモは惜カレドモなり。オモ

ヒ亂レテはイカニセムカト思亂レテ遂ニとなり。ユルスはハナツなり。古義に「こ、はゆるべはなつは本意にはあらねども思ひ亂れし紛れに得留めあへずてゆるしつる謂なり」といへるは少し當らず。もしさる意ならば第三句はヲシカルヲといはざるべからず

みやこ邊君はいにしをたれとけかわが紐の緒乃ゆふ手懈毛

京師邊君者去之乎孰解可言紐緒乃結手懈毛

邊は古義に従ひてヘニとよむべし(略解にはヘへとよめり)○四五を略解にワガヒモノヲノユフ手タユシモとよめるを古義にワガヒモノヲノユフ手タユキモとよみ改めて「タユキモとよまざれば第三句のカの疑詞に結とゝのはず」といへり。ワガヒモノヲ乃の下にシバシバ解ケテといふことを補ひ聞くべきか。但この乃はおちつかず○卷十一(二二七〇頁)にも

君にこひうらぶれをればあやしくも我裏紐結手たゆしも
とあり。参照すべし

(草まくら)たびゆく君を人目おほみ袖ふらずしてあまたくやしも

草枕客去君乎人目多袖不振爲而安萬田悔毛

君ヲは君ナルニなり。アマタはコユダに同じくて俗語のタイサウに當れり
まそかがみ手にとりもちて見れどあかぬ君におくれて生跡もなし
白銅鏡手二取持而見常不足君爾所贈而生跡文無

初二は見にかゝれる序なり

(くもり夜の)たどきも不知山こえています君をばいつとか待たむ

陰夜之田時毛不知山越而往座君乎者何時將待

不知は略解に従ひてシラヌとよむべし(古義にはシラズとよめり)。タドキは案内なり。イマスは行キ給フなり

(たたなづく)青垣山の隔者しましま君乎ことどはじかも

田立名付青垣山之隔者數君乎言不問可聞

青垣山は垣の如く周れる山たり。はやく卷一(六七頁)に見えたり○隔者を略解にへダタラバとよめるを古義にヘナリナバに改めたり。卷四に山河モ隔莫國(七〇八頁)

とあり又ヒトへ山重成物乎ハナレキモノ八ハ一一六六夏夏とあればいづれともよむべし○第四句の乎は爾の誤ならむ。コトドハジカモは物言ハザラムカなり

朝がすみたなびく山をこえていなば吾はこひむなあはむ日までに
朝霞蒙山乎越而去者吾波將戀奈至于相日

卷四(六七五頁)に

大船のおもひたのみし君がいなばわれはこひむなただにあふまでに

卷九(一八〇四頁)に

あすよりは吾はこひむなほり山いはふみならし君がこえいなば

などあり○至于の二字をマデニに充てたるなり

(あしひきの)山は百重にかくすとも妹はわすれじただにあふまでに

一云かくせども君を念苦シスやむ時トキもなし

足檜乃山者百重雖隱妹者不忘直相左右二

一云雖隱君乎思苦止時毛無

妹ハは妹ヲバなり

雲居なる海山こえて伊往イキなば吾はこひむな後はあひぬとも

雲居有海山越而伊往名者吾者將戀名後ノチ者相宿友

伊往を二註にイマシとよめり。宜しくイユクとよむべし。上にもイザリ火ノ光ニ伊

往イキ月マテガテリとあり

よしゑやしこひじと爲モベド杼ハゆふま山こえにしきみがおもほゆらくに

不欲惠八跡不戀登爲杼木綿間山越去之公之所念良國

爲は念の誤か。オモホユラクニはシノバルル事ヨとなり○古義に

略解に「キミガはキミヲと云べきをかくいふは例なり」といへるはいみじきひが

言なり。オモホユルは思ハルルと云にあたれば君ヲ思ハルルとつづくべからず。

必君ガならではつづかず

といへる如し○跡は諸本に師とあり

(草陰の)あらゐの崎の笠島を見つつか君が山ぢこゆらむ

一云み坂こゆらむ

草陰之荒藪之崎乃笠島乎見乍可君之山道越良無

一云三坂越良牟

初句はアラキのアにかゝれる枕辭なり。卷十四にもクサカゲノ安努努ユカムトハ
リシミチとあり。アラキノ崎の所在は知られず。○卷九に

山しなのいは田の小野のははそ原見つつや君が山ちこゆらむ

とあり

玉がつま島熊山のゆふぐれにひとりか君が山ちこゆらむ

一云ゆふぎりに長戀しつといねがてぬかも

玉勝間島熊山之夕晚獨可君之山道將越

一云暮霧爾長戀爲乍寢不勝可母

長戀は卷五(九三五頁)に

おくれゐて那我古飛せずばみそのふのうめのはなにもならましものを

とあり。心得がたき語なり

いきのをにわがもふ君は(とりがなく)あづまの坂をけふかこゆらむ

氣緒爾吾念君者鷄鳴東方坂乎今日可越覽

アヅマノ坂は碓日にや

磐城山ただごえ來ませいそ崎のこぬみの濱にわれたちまたむ

磐城山直越來益磯崎許奴美乃濱爾吾立將待

イハキ山は薩埵峠の古名なりといふ。タダゴエ來はまはり道をせず。に越え來るなり。さてこの來マセは歸來マセなり。○駿河國風土記續歌林良材所引に此歌を其國の女神の作とせり

かすが野の淺茅が原におくれるて時ぞともなしわがこふらくは

春日野之淺茅之原爾後居而時其友無吾戀良苦者

時ゾトモナシはいつが時とも無きにて畢竟止む時も無きなり。古義に夫君ノ旅ニ
出ル時ニ春日野ノ淺茅ガ原マデ送り行シニ云々といへるは非なり。淺茅が原は其